

長野県埋蔵文化財センター年報 36
～2019年度～

一般財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター



中野市 南大原遺跡 環状土坑列（弥生時代中期）



長野市 浅川扇状地遺跡群 竪穴建物跡遺物出土状況（弥生時代後期）



長野市 石川条里遺跡 杭列と遺物集中（古墳時代）



辰野町 沢尻東原遺跡 遺物出土状況（縄文時代中期）



星ヶ塔黒曜石原産地

一の釜遺跡

下諏訪町 一の釜遺跡遠景

諏訪湖から臨む遺跡と星ヶ塔黒曜石原産地

(遺跡から星ヶ塔黒曜石原産地までは、砥川沿いに約 10km)



一の釜遺跡 竪穴建物跡
(縄文前期末葉～中期初頭)



飯田市 羽場権現堂遺跡 竪穴建物跡の埋甕 (縄文時代中期)



長野市 塩崎遺跡群 北陸系器台 (弥生時代後期)



長野市 長谷鶴前遺跡群
三方出土状況および仮復元 (室町～戦国時代)



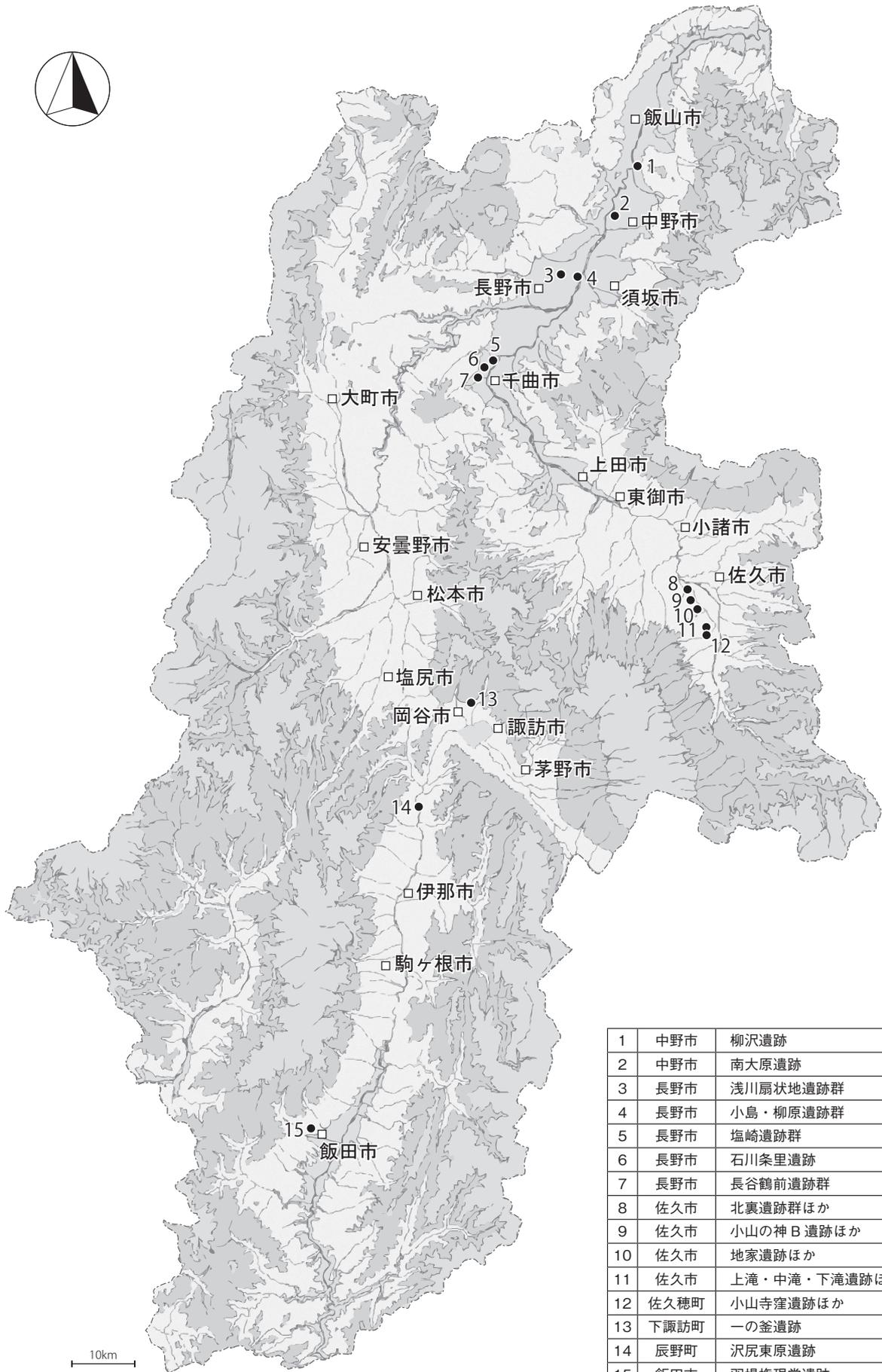
目 次

口絵写真

- ・中野市 南大原遺跡 環状土坑列
- ・長野市 浅川扇状地遺跡群
 竖穴建物跡遺物出土状況
- ・長野市 石川条里遺跡 杭列と遺物集中
- ・辰野町 沢尻東原遺跡 遺物出土状況
- ・下諏訪町 一の釜遺跡遠景
 一の釜遺跡 竖穴建物跡
- ・飯田市 羽場権現堂遺跡
 竖穴建物跡の埋蔵
- ・長野市 塩崎遺跡群 北陸系器台
- ・長野市 長谷鶴前遺跡群
 三方出土状況および仮復元

目 次

I	2019年度の事業概要	1	V	講師招へい・指導	33
II	発掘作業の概要	2	VI	会議・研修会への参加	34
(1)	南大原遺跡	3	(1)	会議・委員会等	34
(2)	浅川扇状地遺跡群	5	(2)	研修会・資料調査等	35
(3)	石川条里遺跡	7	VII	学校・関係機関等への協力	36
(4)	一の釜遺跡	10	(1)	学校関係への協力	36
(5)	沢尻東原遺跡	12	(2)	講師等の派遣・技術指導	36
(6)	羽場権現堂遺跡	15	(3)	関係機関等への協力	37
III	整理等作業の概要	16	(4)	調査資料の利用	37
(1)	柳沢遺跡	17	VIII	組織・事業の概要	39
(2)	小島・柳原遺跡群	18	(1)	組織	39
(3)	塩崎遺跡群	20	(2)	職員	39
(4)	長谷鶴前遺跡群	22	(3)	事業	40
(5)	地家遺跡ほか	23	IX	調査研究ノート	41
IV	普及公開活動の概要	25	(1)	北信地域における弥生時代中期後半から 後期初頭の石器組成 - 栗林式期から吉田式期を対象として -	42
(1)	施設公開	26	(2)	浅川扇状地遺跡群桐原地区出土の猪目墨書 土器について	50
(2)	現地説明会・見学会	27	(3)	長谷のかめやき - 長谷焼調査の覚書 -	56
(3)	速報展	28			
(4)	県庁ロビー展・出土品展等	29			
(5)	講座・出前授業・発掘体験等	29			
(6)	体験学習用教材	31			
(7)	施設利用	31			
(8)	出版物	32			



1	中野市	柳沢遺跡
2	中野市	南大原遺跡
3	長野市	浅川扇状地遺跡群
4	長野市	小島・柳原遺跡群
5	長野市	塩崎遺跡群
6	長野市	石川条里遺跡
7	長野市	長谷鶴前遺跡群
8	佐久市	北裏遺跡群ほか
9	佐久市	小山の神 B 遺跡ほか
10	佐久市	地家遺跡ほか
11	佐久市	上滝・中滝・下滝遺跡ほか
12	佐久穂町	小山寺窪遺跡ほか
13	下諏訪町	一の釜遺跡
14	辰野町	沢尻東原遺跡
15	飯田市	羽場権現堂遺跡

図1 2019年度調査・整理対象遺跡

I 2019年度の事業概要

本年度は、国の公共開発事業にかかる発掘調査事業4件、県事業3件に加え、辰野町とJR東海の事業各1件および研修等事業を受託した。また、普及公開事業として、施設公開および速報展等を行ったほか、遺跡説明会を実施した。

1 発掘調査事業

国土交通省3億3,125万円、長野県1億9,356万円、その他計6億7,828万円の受託費により、6遺跡の発掘作業と34遺跡の整理作業を行い、発掘調査報告書を7冊刊行した。

(1) 発掘作業

辰野町沢尻東原遺跡では18,000㎡の発掘を行い、縄文時代中期の竪穴建物跡50軒を確認した。建物跡からは当該期の豊富な土器・石器等が出土し、建物跡群の空閑には35基の屋外埋設土器が集中していた。集落構成や変遷など、来年度からの整理作業で明らかにしていくことになる。

下諏訪町一の釜遺跡や飯田市羽場権現堂遺跡では、小面積ながら竪穴建物跡と土坑群が見つかった。一の釜遺跡では縄文前期末葉から中期初頭の建物跡2軒と袋状土坑を確認した。遺跡は黒曜石原産地と諏訪湖の動線上にある。出土黒曜石の徹底した分析が遺跡の性格解明の糸口となろう。

中野市南大原遺跡は2013年度に続く発掘で、主として弥生時代中期後半の集落跡を確認した。前回同様、竪穴建物跡から鉄製品や小鉄片、砥石、台石等が出土し、初期の鉄生産を担った集落として注目したい。今回新たに、環状に並ぶ土坑列を確認し、集落の性格を巡って課題が増えた。千曲川流域には個性豊かな大集落が多い。それらとの関係も検討していかなければならない。

長野市石川条里遺跡では水田跡の調査を継続した。今年度は、新たに古墳時代前期の畦畔や杭列とともに小型丸底土器や高坏、玉類の遺物集中が

みつかった。長野自動車道建設に伴う調査では、当該期の祭祀遺構を確認している。生産域と祭祀遺物との関係や出土状態に注視していきたい。

長野市浅川扇状地遺跡群は、着手から9年を経て道路建設に伴う発掘がようやく終了した。縄文時代から江戸時代までの膨大な遺構・遺物の整理作業を通じて、各時代の特色を把握するとともに、本遺跡が地域に及ぼした影響に迫りたい。

(2) 整理等作業

中部横断自動車道の佐久南ICから八千穂高原IC間にある31遺跡の調査報告を5冊に分けて発刊した。旧石器：満り久保・高尾A、縄文：小山の神B、弥生：北裏・西東山、古墳：高尾5号墳・尾垂古墳・兜山古墳、古代生産遺跡：奥日影・洞源、古代集落：尾垂・上滝・小山寺窪、中世：地家・小山寺窪、塚：庚申塚ほかなど、千曲川左岸域の山麓に並ぶ個性的な遺跡を報告した。

長野市小島・柳原遺跡群では、全国的に希少な塔鏡形合子の蓋について、指導委員会からの助言を得ながら種々の検討を行い、本遺跡から出土した意義について見解をまとめた。

中野市柳沢遺跡は、青銅器埋納坑を発見した前回調査を補足する内容を提示した。

長野市長谷鶴崎遺跡群では、中世の堀・道路跡や近代の窯工房跡などの整理を進めた。

2 研修、普及公開事業

研修事業は、奈良文化財研究所の専門研修「堆積・地質学基礎課程」ほか4講座を受講し、文化庁主催の文化財マネジメント講習などに参加した。

普及公開事業は、「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の補助金を活用して、冒頭に紹介したイベントを実施したほか、広報誌「信州の遺跡」や「ジュニアこうこがく」を発行した。教材資料として塔鏡形合子の模造品を製作した。(平林 彰)

II 発掘作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	主な遺構	主な遺物
みなみおほはら いせき 南大原遺跡	中野市	防災・安全交付金 (道路) 事業 一般県道三水中野線	3,385	4月3日～1月22日	弥生：竪穴建物跡、竪 穴状遺構、礫床木棺墓、 木棺墓、環状土杭列、 遺物集中 弥生～古墳：溝跡 弥生以降：土坑	縄文：石器 弥生：石器（打製・磨製石 鏃、打製・磨製石斧、砥石、 台石ほか）、土製勾玉、管 玉、ガラス小玉、鉄製品（工 具または武具・小鉄片） 弥生～古墳：土器
あさかわせんじょうち 浅川扇状地 いせきぐん 遺跡群	長野市	社会資本整備総合交付金 (街路) 事業 (都) 高田若槻線	1,380	4月8日～11月29日	弥生～平安：竪穴建物 跡 弥生・古代・中世：溝 跡（堀跡） 弥生・古代・中近世： 土坑	弥生～近世：土器、石器 古代以降：鉄製品 中世以降：木製品
いしかわじょうり 石川条里 いせき 遺跡	長野市	一般国道18号 (坂城更埴バイパス) 改築工事	12,100	4月5日～12月26日	弥生～古墳：遺物集中 弥生～平安：畦畔 弥生、平安：水田跡 古墳：杭列 平安～近世：土坑	縄文～弥生：石器（石鏃、 刃器、凹石） 弥生～近世以降：土器、 陶磁器 弥生～平安：木製品（杭） 古墳：木製品（鏃 建築部材） 古墳以降：玉類（管玉、 勾玉、算盤玉） 平安：木製品（田下駄など） その他：種実
いち かまい いせき 一の釜遺跡	下諏訪町	一般国道20号 (下諏訪岡谷バイパス) 改築工事	1,600	8月1日～11月29日	縄文：竪穴建物跡 縄文、古代：土坑	縄文：石器（石鏃、石斧、 石匙、石皿など） 縄文、古代：土器
さわじりひがしはら 沢尻東原 いせき 遺跡	辰野町	北沢東工場適地の 開発事業	18,000	4月8日～2月5日	縄文：竪穴建物跡、土坑、 屋外埋設土器 古墳：竪穴建物跡	縄文：石器（石鏃、石斧、 石匙、石皿など）、土製品 (土偶、ミニチュア土器) 縄文、古墳：土器（蛇体 取手付土器など）
はばこんげんどう 羽場権現堂 いせき 遺跡	飯田市	中央新幹線建設関連	500	5月8日～7月31日	縄文：竪穴建物跡、土 坑	縄文：土器、石器（石鏃、 石皿など）

(1) 南大原遺跡

防災・安全交付金（道路）事業
一般県道三水中野線

所在地および交通案内：中野市上今井字南 1071-1
ほか 上信越自動車道信州中野 I C から北西に
約 2.3km

遺跡の立地環境：千曲川は 1870~1872（明治 3
~5）年に現在の位置に開削されているが、遺跡
形成時には旧千曲川左岸の曲流部に発達した自然
堤防上に立地。対岸には弥生中期栗林式土器の標
式遺跡で著名な栗林遺跡（県史跡）がある。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2019.4.3 ~ 2020.1.22	3,385㎡	柳澤 亮 鈴木時夫

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	10 (20)	弥生中期後半~後期
掘立柱建物跡	0 (6)	弥生中期後半
竪穴状遺構	2 (4)	縄文・弥生中期後半
礫床木棺墓	2 (5)	弥生中期後半
木棺墓	5 (7)	弥生中期後半
方形周溝墓	0 (1)	弥生後期~古墳前期
溝跡（埋没谷含む）	3 (6)	弥生中期後半~古墳前期
環状土坑列	2 (2)	弥生中期後半
土坑	190 (319)	縄文・弥生中期後半以降
遺物集中	2 (2)	弥生中期後半

() 内は 2011 年度からの合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	弥生中期後半~古墳前期
土製品	弥生中期後半~後期（土製勾玉）
石器	縄文、弥生中期後半~後期（打製石鏃、磨製石鏃、 打製石斧、磨製石斧、砥石、台石ほか）
石製品	弥生中期後半（管玉）
ガラス	弥生後期前半（ガラス小玉）
鉄製品	弥生中期後半（工具または武器・小鉄片）



図2 南大原遺跡の位置 (1:50,000)

調査の概要

縄文~平安時代の集落遺跡で、過去 4 次（1950・
1957・1979・2011 ~ 2013 年）の発掘調査が行わ
れている。本年度の調査区は当センターによる第
4 次調査部分（県道三水中野線改修用地）に隣接
する。本調査でも弥生時代中後期の集落跡を良好
な状態で確認した。

弥生時代中期の集落

過去の調査成果も含めて弥生時代中期後半（栗
林式期）の集落を概観する（図5）。

標高が最も高い集落中央部から略楕円形に土坑
を配置する「環状土坑列」2 基を検出した。また、
土坑列に近接して東西 2 か所からは土器がまと
まって出土している。さらに土坑列を囲むように
竪穴建物跡 17 軒・竪穴状遺構 3 基等が分布して
いる。この他に集落内には、礫床木棺墓 5 基と木
棺墓 7 基（小口のみ検出含む）から構成される墓
域が 1 か所にまとまっていることが判明した。な
お、本年度みつかった小さな礫床木棺墓からは管
玉 20 点がまとめて出土した（図3 右側）。



図3 並んで検出された礫床木棺墓 2 基

環状土坑列の発見（口絵参照）

調査区南東部で直径0.6~0.9mある、当遺跡では比較的大形の土坑が弧状に並んで検出された。配列は南北にずれて2つあり、土坑の重複関係から北側が新しい。中野市教委による隣接リング畑での別件立会調査でも、同円弧上に土坑が発見されたため、土坑が環状に配列している可能性が極めて高いことがわかった。

南側土坑列の平面形は、長径約18mの楕円形を呈し、全体のおよそ半分を検出したと考える。北側土坑列は検出範囲が狭いが、土坑規模や円弧の形状から南側と同規模だろう。土坑の深さは0.1~0.6mと深浅あり、深いものには柱痕跡が観察される例もある（図4）。

これまでに類例ない遺構であり、今後、性格や構造について検討していきたい。

鉄器加工の痕跡

第4次調査に引き続き、新たに竪穴建物跡3軒から鉄製品・小鉄片が出土した。そのうちの1軒



図4 柱痕跡がある土坑（北側環状土坑列）

から砥石や台石等の加工具も出土していることから、竪穴建物内で小規模な鉄器加工が行われたと考えられる。

来年度に向けて

発掘調査は、本年度台風による千曲川氾濫の影響等で調査延期した部分を実施して、集落範囲を確定する。また、本格整理では鉄器加工技術を要し、環状土坑列を中央に置く集落構成の分析から、弥生中期集落の実態に迫りたい。（鈴木時夫）

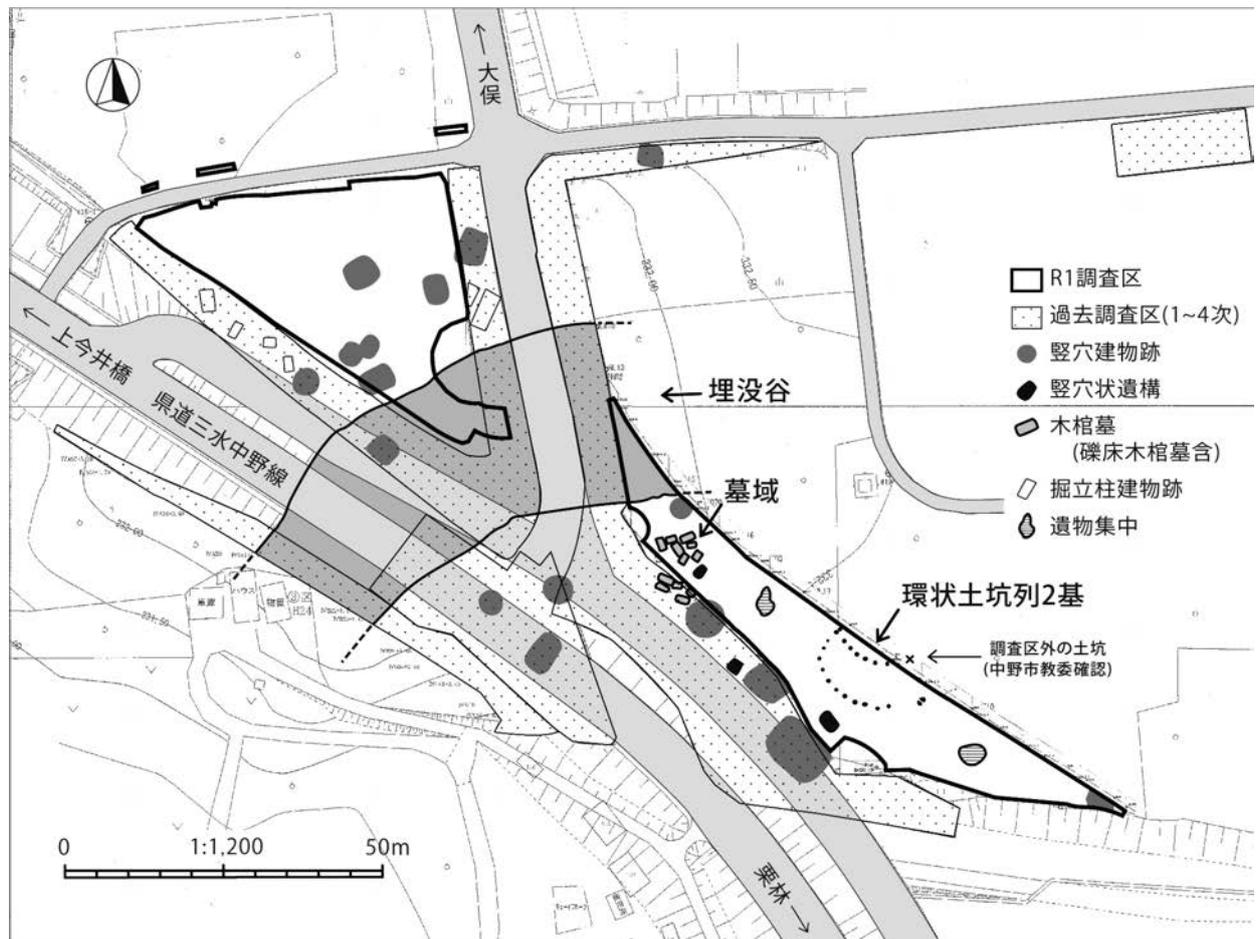


図5 弥生時代中期後半集落の遺構分布概略図

あさかわせんじょうち いせきぐん (2) 浅川扇状地遺跡群

社会資本整備総合交付金（街路）事業
（都）高田若槻線

所在地および交通案内：長野市桐原 2-19 ほか
長野電鉄桐原駅から南約 0.3km

遺跡の立地環境：飯縄山を水源とする浅川によって形成された扇状地上に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2020.4.8 ~ 11.29	1,380㎡	西 香子 村井大海 伊藤 愛

検出遺構

遺構の種類	数		時期
竪穴建物跡	15	(218)	弥生、古墳、平安
溝跡	10	(90)	弥生、古代、中世
土坑	125	(1488)	弥生、古代、中近世

() 内は 2011 年度からの合計数

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・石器	弥生時代後期、古墳時代前期、古代、中近世 近世以降
鉄製品	古代以降（銭貨、キセル）
木製品	中世以降（曲物）



図7 調査地全景（南上空より）



図6 遺跡の位置 (1:50,000)

調査の概要

本年度は桐原牧神社の南東にあたる桐原地区と相ノ木通り沿いの吉田田町地区の2か所で発掘調査を行った。桐原地区では弥生時代後期から平安時代の集落跡と中世の居館（桐原要害）の堀跡を、吉田地区では弥生時代後期の集落跡と近世以降の土坑等を検出した。

弥生時代の集落跡

遺構としては、吉田田町地区では竪穴建物跡1軒・溝跡1条や土坑を、桐原地区では竪穴建物跡1軒を確認した。いずれも遺構の所属時期は後期である。吉田田町地区の建物跡は、遺物の出土が少なく詳細な時期ははっきりしないが、2012・2013年度に行った隣接する地区の調査から、後期中葉に所属すると考えられる。桐原地区の建物跡は、埋土より、完形に近い甕や壺などの土器が多く出土しており、希少なミニチュア土器（高さ4.3cm）もみつまっている。出土遺物より、遺構の時期は、後期後葉と考えられる。



図8 ミニチュア土器出土状況

古墳時代の集落跡

桐原地区で竪穴建物跡1軒を確認した。北側の地区から続く前期の集落域に所属しており、建物跡の埋土からは、壺や甕・蓋など大きめの土器片が多数出土しており、床面からは建物の部材と思われる炭化材が出土している。他の前期の竪穴建物跡と同様、在地の土器と共に東海地域の特徴を持つ台付き甕の破片などが出土していて、東海地域との交流がうかがわれる。

古代の集落跡

桐原地区で平安時代の竪穴建物跡12軒と溝跡や土坑を確認した。後世のかく乱を受けている部分が多く、出土した土器も少なめであったが、文字や記号が書かれた墨書土器、径7.5cm・厚さ2.5cm・重さ168.8gを測る土製の紡錘車など、稀少な遺物がみつまっている。遺構の時期は、出土遺物や遺構の切り合いから、8世紀末・9世紀前半・9世紀後半の3時期に分かれると考えられる。



図9 古墳時代の竪穴建物跡

中世の堀跡

桐原地区で幅2.4~3.2m、深さ0.3~1.0mの居館(桐原要害)の堀跡を確認した。2011年度に北側の地区で調査を行った堀跡の西辺が、更に南に延びており、南北約118mに達することが確認できた。堀跡の埋土からは、銭貨や内耳鍋の破片などが出土している。出土遺物から、遺構の埋没時期は15世紀前半頃と考えられる。

近世の集落跡

吉田田町地区から土坑27基を確認した。その多くは埋土に炭化物が混入しており、なかでも幅約110cm、深さ30cmの方形に近い土坑(SK5089)は、土壁が焼けたと考えられる粘土塊や、炭化材・炭化種子などが厚く堆積していた。このような堆積の様子から、確認した土坑は、「田町の大火(1864(元治元年)年)」との関連が想定される。遺物としては、生活雑器の陶磁器類や銭貨・キセルなどの金属製品が出土している。

(西 香子)



図11 中世の堀跡



図10 竪穴建物跡の埋土から出土した土製紡錘車



図12 近世の土坑(SK5089)の堆積状況

(3) 石川条里遺跡

一般国道18号（坂城更埴バイパス）
改築工事

所在地および交通案内：長野市篠ノ井塩崎 248-1
ほか JR 篠ノ井線稲荷山駅から南約 1km
遺跡の立地環境：千曲川左岸の後背低地に立地
発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2019.4.5 ~ 12.26	12,100㎡	河西克造 廣瀬昭弘 村井大海 風間真起子 櫻井秀雄 伊藤 愛

検出遺構

遺構の種類	数		時期
掘立柱建物跡	0	(7)	中世以降
土坑	14	(440)	平安～近世
墓跡	0	(5)	中世～近世
溝跡	8	(169)	平安～近世
井戸跡	0	(40)	中世～近世
畦畔	29	(94)	弥生、古墳、平安
遺物集中	1	(2)	古墳
水田跡	3	(7)	弥生、平安
畝状遺構	0	(1)	近世以降（天地返し）
杭列	4	(4)	古墳

() 内は 2016 年度からの合計数

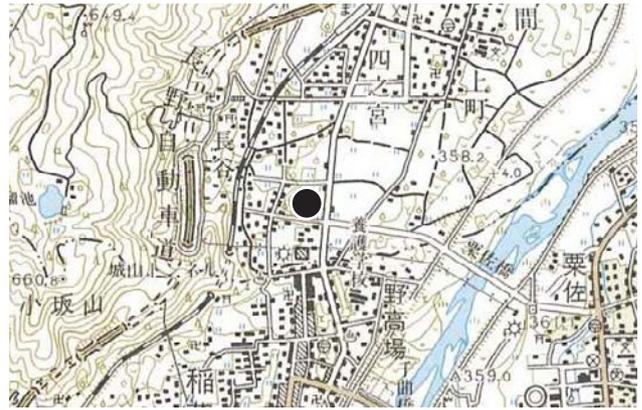


図 13 石川条里遺跡の位置 (1:50,000)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	弥生～近世以降
石器	縄文～弥生（石鍬、刃器、凹石）
玉類	古墳以降（管玉、勾玉、算盤玉）
木製品	弥生～平安（杭）古墳（鍬、建築部材、杭） 平安（田下駄、建築部材、杭）
その他	種実

調査の概要

石川条里遺跡は、水田を主体とした遺跡である。2016 年度に発掘調査を開始し、4 年間継続して実施してきた。そして 2013 年度に開始した坂城更埴バイパス改築工事に伴う 3 遺跡の発掘調査は、一部の残件箇所を除いて終了することになる。

本年度は 2 面の調査を実施し、第 1 面で平安時代以降の水田跡や溝跡などを、第 2 面で古墳時代の畦畔や杭列、遺物集中を検出した。なお、昨年度に確認した弥生時代の水田跡は、水田面を被覆する泥炭層の遺存状況が悪く、検出できなかった。

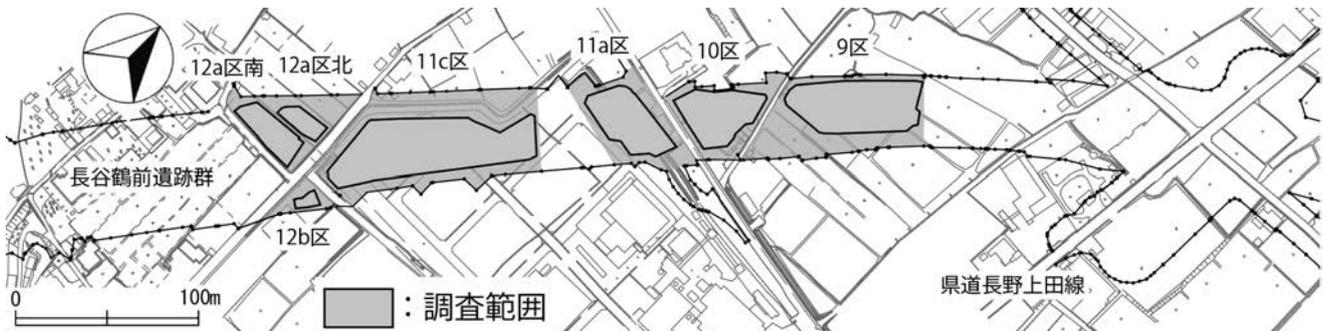


図 14 2019 年度 石川条里遺跡 調査地区

洪水砂で埋まった平安時代の水田跡

11区と12区の第1面では、平安時代後半に千曲川の洪水（洪水砂）で埋まった水田跡を検出した（図15）。

畦畔は、基本的に南北方向に延びるが、蛇行する大畦畔や、南北方向より振れた小畦畔があった。また、部分的に途切れる畦畔があり、水田一筆が形成されていない状況もみられた。さらに、水田面では、①ほぼ平坦で比較的足跡が残る田面、②凹凸が激しく明瞭な足跡が分布しない田面、の2種類がみられた。①を囲む畦畔は整っていたが、②を囲む畦畔は随所で凹凸がみられる状況であった。洪水砂が畦畔の側面に入り込む場所もみられた。

以上の状況から、埋没前の水田跡は、畦畔すべてが南北方向に延びていないことがわかった。また、水田面については、現在の水田耕作の段階からすると、①は田植え頃、②は耕起直後の姿と推測でき、水田耕作が一様に進行していなかったことがわかった。次に、埋没後では畦畔の直上で確認した落ち込みがある（図16）。この落ち込みは、



図15 平安時代の水田跡（①②は本文と対応）

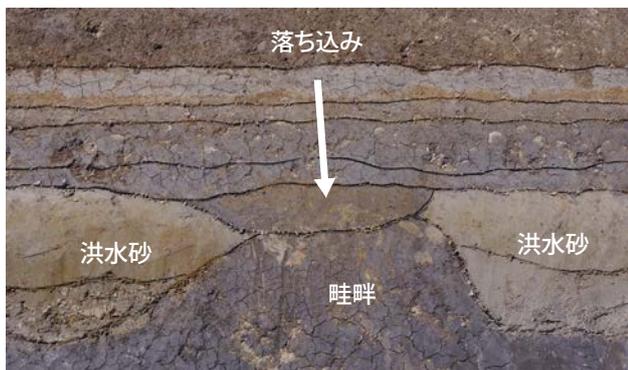


図16 畦畔の直上にある落ち込み

土層断面で約10か所確認でき、水田が洪水砂で埋まった後、畦畔を探すために掘削したものと考えられる。洪水後の復旧痕跡と推測できるが、畦畔は検出できなかった。

芯材が埋設された古墳時代の畦畔

10区と11区の2面では、多量の木材（芯材）が埋設された大畦畔を確認した（図17）。昨年度に実施したプラント・オパール分析で、水田耕作土と判断された土層から検出したものである。

大畦畔は幅1~1.5mを測り、南北方向より西に50~60°振れた方向に延びていた。古墳時代には、この方向を軸とした大区画が形成されていたと考えられる。

大畦畔に埋設された芯材は、長さが1~2mを測る木材が重ねられ、杭で固定されていた（図17）。芯材は自然木が大半を占める。さらに、芯材に近接して、古墳時代と考えられる土器が出土しており、芯材とともに大畦畔に埋設されたものと推測する。



図17 古墳時代の畦畔 芯材の出土状況

木材を多用した古墳時代の遺構

本年度調査区のなかで最も東側に位置する9区の2面では、杭列と遺物集中を確認した（図18）。杭列は、芯材が埋設された古墳時代の大畦畔と同じ方向に延びる。杭には丸太材と割り材が



図 18 古墳時代の杭列と遺物集中 (SX002)

用いられ、基部が炭化したものもみられた。杭列に伴う盛り上がりは確認されていない。

遺物集中 (SX002) は、杭列に近接する場所で確認した。長辺約 5 m、短辺約 3 m、深さ約 30 cm (検出面での計測値) を測り、上端・下端とも随所で蛇行する不整形の落ち込みである。SX002 からは多量の木材と土器が集中した状態で出土し、小型丸底土器と高坏、ミニチュア土器、木製の鍬と建築部材を確認した。供献用の小型丸底土器は 10 点以上確認し (図 19・20)、落ち込みの底面から出土した土器もみられた (図 19)、ミニチュア土器は、小型丸底土器を模倣したものと考



図 19 SX002 での木材・小型丸底土器の出土状況



図 20 ミニチュア土器
(口径 3.1 cm、器高 2.5 cm)

えられる。小型丸底土器が、一般の竪穴建物跡から出土する坏や甕より多くみられた。

SX002 の近くからは管玉と勾玉が出土した。調査区周辺で行われた

非日常的な行為に伴う遺物と推測する。

今回、これまでの調査で明確ではなかった古墳時代の遺構を発見し、古墳時代に帰属する土層が確定できた点で大きな成果が得られた。

千曲川の後背湿地を横断する形で 4 年間実施した石川条里遺跡の調査では、中世以降、平安時代、古墳時代、弥生時代の遺構・遺物を発見した。特に、平安時代と弥生時代では、水田の構造を捉えることができた。

今後は、本遺跡の南側に隣接する長谷鶴前遺跡群の調査成果を合わせて、今回の調査区における土地利用をより明らかにしていきたい。

(河西克造)

(4) いちかまいせき 一の釜遺跡

一般国道 20 号（下諏訪岡谷バイパス）
改築工事

所在地および交通案内：下諏訪町社 7876-1 ほか
JR 下諏訪駅から北西約 2 km

遺跡の立地環境：霧ヶ峰山塊から流下した谷に挟まれた南向きの傾斜地に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2019.8.1 ~ 11.29	1,600㎡	藤原直人 長谷川桂子

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	2	縄文時代前期末～中期初頭
土坑	19	縄文時代前期末～中期初頭 古代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代前期末～中期初頭、古代
石器	縄文時代前期末～中期初頭（石鏃等）

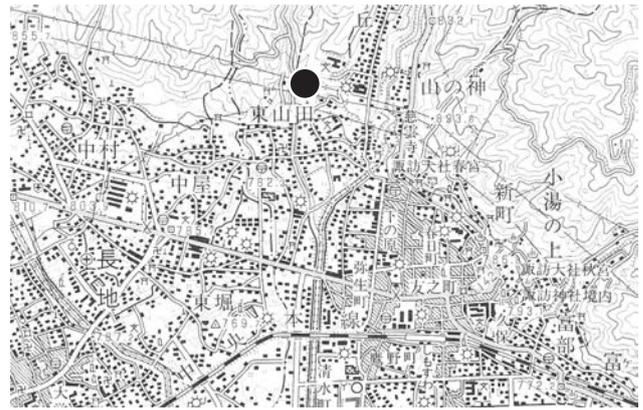


図 21 一の釜遺跡の位置 (1:50,000)

調査の概要

本遺跡は 1971 年度の調査を皮切りに、1988 年度に 2 次・3 次、1999 年度に 4 次の調査が行われ、縄文時代早期～中期初頭の遺構・遺物がみつまっている（下諏訪町教育委員会 1979.1989.1990.1999）。

今回の調査区は南向きの急傾斜地で、現況は造成により 4 段の平坦面に分かれていた。調査にあたり、地形に沿ったトレンチ調査から始めた。

その結果、調査区北側で黒曜石の剥片が散在する遺構を確認した。南側では黄褐色土の遺構検出面が後世の造成により削平やかく乱を受け、遺構を確認できなかったため面的調査は不要と判断した。

遺構と遺物

竪穴建物跡 SB01 は東西幅約 4 m、南壁は削平を受けていて、北壁側に柱穴 2 基を確認した。埋



図 22 一の釜遺跡北側全景

土からは、黒曜石製の石器（石鎌・スクレイパーなど）や安山岩製の台石・石皿などが出土した。

SB02は埋土中から黒曜石の剥片や碎片が多数出土した。床面と思われる平らな面の一部に焼土が分布し、竪穴建物跡と判断した。



図 23 竪穴建物跡 SB02 遺物出土状態
竹串の位置から黒曜石の剥片・碎片が出土

直径1 m程の土坑の多くは、底面付近の壁が外側にやや膨らんだ袋状を呈する。埋土中からは縄文土器片や黒曜石製の石器や剥片が出土しているが、2次調査で発見されたような黒曜石原石を貯蔵した土坑はみつかっていない。

土坑SK10には拳大から人頭大の礫が多数含まれ、礫を廃棄した可能性を考えている。ここからは、安山岩の円礫を素材とした石皿が1点出土し

た。SK18は南北約1 m、東西約50cmの長方形の土坑で、底面近くの隅から平安時代の坏が1点出土している。単独の墓抗であろう。本遺跡で初めて古代の遺構を検出した。

周辺遺跡との関わり

本遺跡の北東の霧ヶ峰山塊には、国史跡の星ヶ塔黒曜石原産地遺跡（直線距離で約7.5km）などの黒曜石原産地遺跡が知られている。調査した遺構からは、多くの黒曜石製の石器や剥片が出土し、その関連が検討課題である。

周辺の南斜面には縄文時代前期から中期の遺跡が立地する。特に谷を挟んだ東に隣接する武居林遺跡は縄文時代前期末の集落跡として知られ、本遺跡との関係解明が今後の課題である。

（長谷川 桂子）



図 24 土坑 SK10 礫出土状態

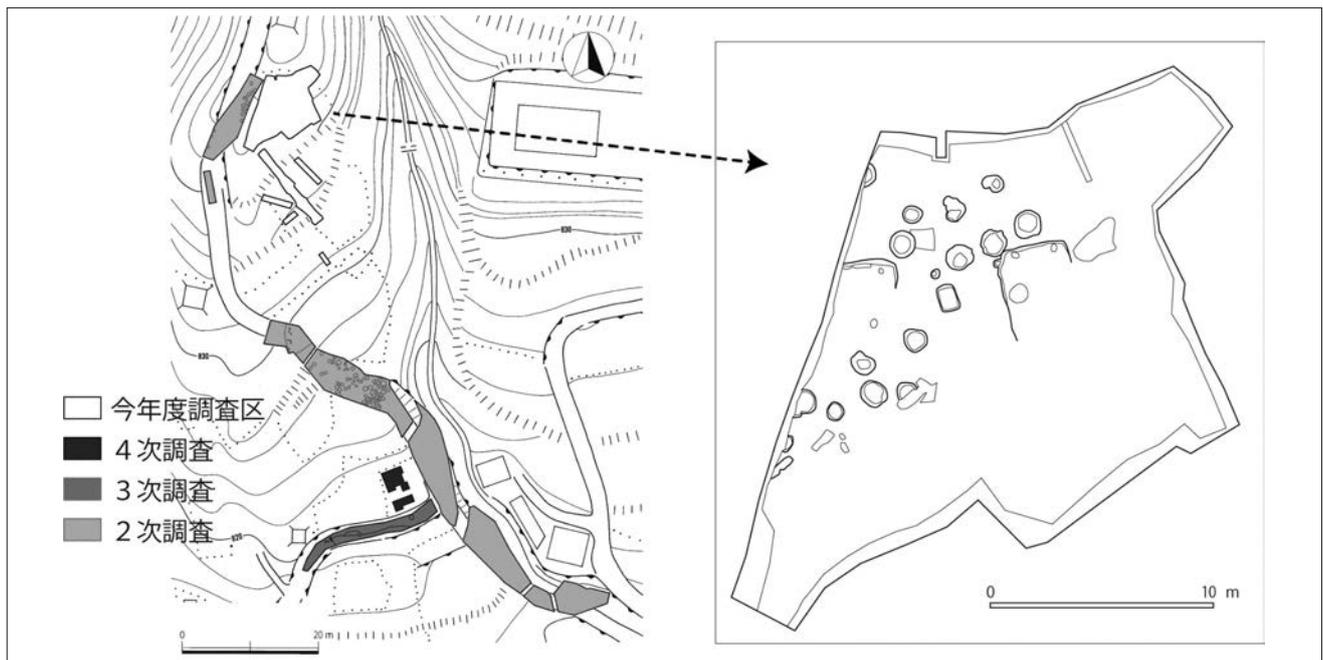


図 25 一の釜遺跡遺構配置図

(5) さわじりひがしばら いせき 沢尻東原遺跡

北沢東工場適地の開発事業

所在地および交通案内：辰野町大字伊那富 6776
ほか JR 飯田線羽場から南東約 0.7km

遺跡の立地環境：天竜川右岸の河岸段丘に立地
天竜川との比高は約 13m

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2019.4.8 ~ 2020.2.5	18,000㎡	廣田和穂 大竹憲昭 田中一穂

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	51	縄文時代 古墳時代
土坑	56	縄文時代
屋外埋設土器	35	縄文時代

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文、古墳前期
土製品	縄文（土偶・ミニチュア土器）
石器	縄文（打製石器・磨製石器・石皿等）

調査の概要

事業対象用地内において、辰野町教育委員会が試掘調査を行い、遺跡がひろがると推測した範囲を調査した（図 27）。

調査範囲は、昭和 30 年代以降のほ場整備により縄文時代の遺物包含層が削平を受けた箇所があり、柱穴や炉しか残っていない遺構もある。

縄文時代中期の環状に並ぶ集落

縄文時代中期中葉を中心とした竪穴建物跡が調査範囲全体で確認できた。ほぼ集落の全域を調査したと考える。

各竪穴建物跡から出土した土器の観察に基づき時期を細分すると、建物跡は 5～7 期程度に変遷し、各期の集落は 5～8 軒程の竪穴建物からなる

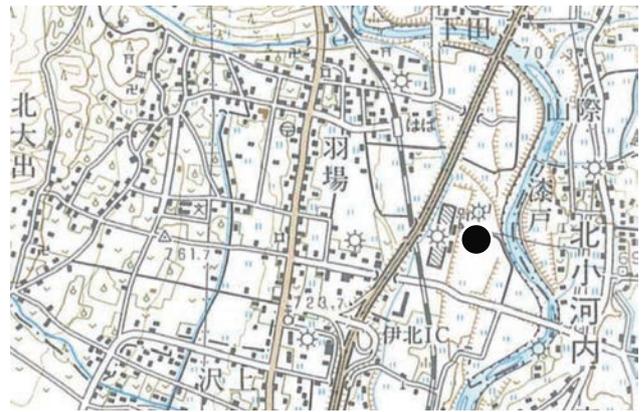


図 26 沢尻東原遺跡の位置 (1 : 50,000)

可能性がある。また、各期の建物跡は特定の場所に集中せず調査区全体に点在する。さらに調査範囲の中央には竪穴建物跡が確認できない空間が存在する。

これらの点から、本遺跡の竪穴建物群は環状に並ぶ可能性がある（図 31）。

多様な竪穴建物跡

竪穴建物跡の形状は円形から楕円形を基本とする。規模は直径 3～7 m 前後まで差があり、支柱穴の配置は壁面に沿う例（図 28）、左右対称の例、



図 27 遺跡全景



図 28 井戸尻式期の竪穴建物跡 (S B 13)

不規則な例などがある。炉は埋甕炉、石囲炉、石囲埋甕炉などがある。石囲炉の形状は円形、楕円形、長方形がある。埋甕炉や石囲埋甕炉の深鉢には、胴部の周りに土器片が並べられたものや、底部に土器片が敷かれる例もある（図29）。2号竪穴建物跡には長軸1.4mの大形石敷石囲炉があり、その底面には拳大～人頭大の平石が敷かれている（図30）。

竪穴建物跡の多様性の背景には時期差だけでなく地域的な特徴が存在するかどうか、今後の検討課題となる。

屋外埋設土器群

竪穴建物跡の分布範囲の内側で検出した。総数35基を数え集中地点が2か所ある（図31）。

屋外埋設土器群の検出面は、周辺の竪穴建物跡

の床面レベルよりも高い。本遺跡全体が過去のほ場整備で削平されていたとしても、周辺に炉や柱穴が見られない点から竪穴建物内の施設として考えにくい（図32）。屋外埋設土器の時期は藤内式～曾利I式期に収まる。後世の削平により口縁部～上半部が欠損する例もあるが、口縁部から底部まで残存する。土器は正位を基本とするが、やや斜位となる例もある（図33）。

屋外埋設土器の中からは握拳大の礫や磨石などが出土した例がある。また少量ながら骨片も出土していた。

現在のところ、中部地方では中期中葉における屋外埋設土器群の様相は不明瞭で、今後の整理作業における検討課題である。



図29 埋甕炉の底に敷かれた土器（S B 14）



図30 石敷石囲炉（S B 2）

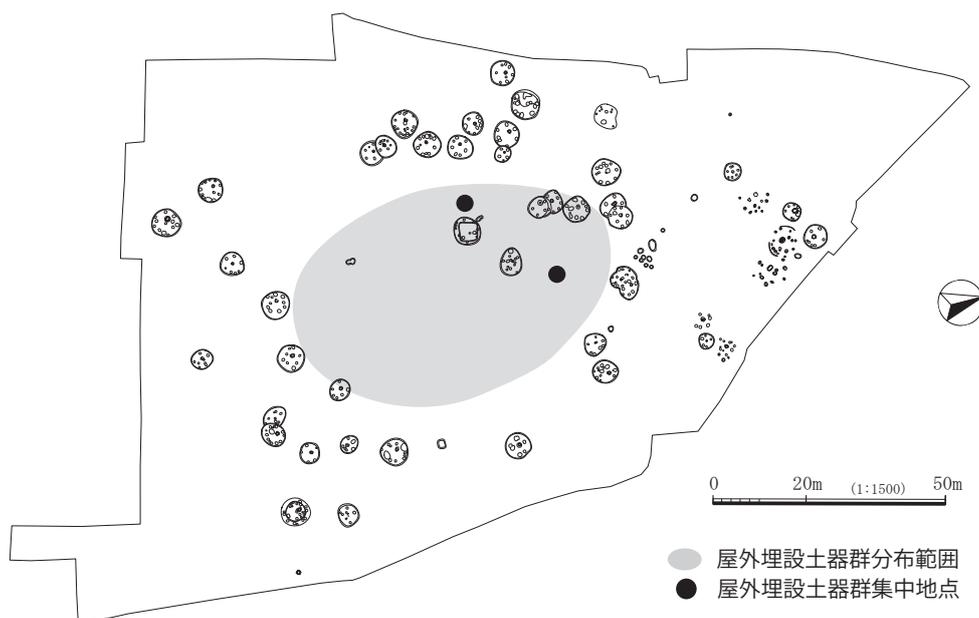


図31 沢尻東原遺跡 主要遺構配置図（1：1500）



図 32 屋外埋設土器群

出土遺物

土器は新道式～曾利Ⅱ式を中心とする。深鉢のほか、蛇体把手土器（図 34）や有孔鏝付土器、台付深鉢、浅鉢なども出土した。

土器における器形や文様の特徴は、八ヶ岳山麓や山梨県に分布するものと共通する部分もある。

また 13 号竪穴建物跡からは東信地域に特徴的な焼町式土器も出土している。口縁部環状突起や体部中位の橋状把手が明瞭に確認できる（口絵）。

土製品では、土偶、ミニチュア土器等が出土した。土偶は頭、手、胴部などの破片で顔は眉と鼻が連結する例や臀部が出尻となる例など中南信に特徴的なものである（図 35・36）。

石器は、石鏃、石錐、削器、凹石、磨石、打製石斧、磨製石斧、石皿等が出土した。特に削器は基部の両側に抉りを入れた大形の粗製石匙が一定量存在し、八ヶ岳周辺との共通性が注目される（図 37）。



図 34 埋甕炉の底に敷かれた土器（S B 14）



図 33 屋外埋設土器

古墳時代前期

竪穴建物跡を 1 基検出した。不整形で地床炉を伴う。埋土中より S 字口縁甕と球胴の刷毛甕が出土した。辰野町では当該期の竪穴建物跡は初見となる。

今後の課題

沢尻東原遺跡は、上伊那地域における縄文時代中期の集落調査事例の中では竪穴建物跡の軒数が多く継続期間が長いのが特徴である。今後、出土土器の整理を進め、各遺構の帰属時期を明確にし、集落の変遷や屋外埋設土器群との関連性を明らかにしたい。

沢尻東原遺跡からみて、天竜川の対岸には樋口内城遺跡が立地する。沢尻東原遺跡の集落が終焉を迎えるころ、樋口内城遺跡の集落が拡大する傾向がある。周辺遺跡との集落の消長や、性格の差異を検討することも重要な課題となる。

（廣田和穂）



図 35 土偶（顔）



図 36 土偶（臀部）



図 37 粗製石匙

(6) 羽場権現堂遺跡

中央新幹線建設工事関連

所在地および交通案内：飯田市大休 1575-1 ほか
JR 飯田駅から北西へ約 2.5km

遺跡の立地環境：飯田松川の左岸の河岸段丘上
風越山の南麓に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
2019.5.8 ~ 7.31	500㎡	藤原直人 長谷川桂子

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物跡	2	縄文時代中期
土坑	124	縄文時代中期

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文時代前期初頭～後半
石器	縄文（石鏃、石皿など）

調査の概要

一帯は畑地として利用されている。同じ段丘上には縄文時代早・中期の遺跡である権現堂前遺跡、正永寺原遺跡、押洞遺跡や弥生時代後期の集落である羽場曙遺跡、さつみ遺跡が分布している。

2018 年度、県道改良事業に伴い飯田市教育委員会の確認調査によって縄文時代の遺構・遺物が確認され、同時期の集落跡の存在が指摘された。

今回の調査で、埋甕炉を持つ縄文時代中期初頭

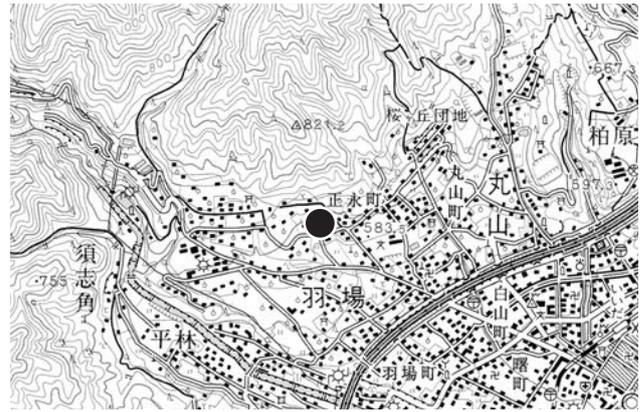


図 38 羽場権現堂遺跡の位置 (1 : 50,000)



図 39 調査区 (1 区) 全景 東から

の竪穴建物跡が見つかった。飯田地域では該期の竪穴建物跡の調査例は少なく、貴重な事例である。

また、出土土器の中には他地域の特徴を持つ資料が見受けられることから、該期の交流を考える上で良好な資料といえる。

遺跡の存在する丸山・羽場地区では今までの調査によって縄文時代から弥生時代の間に洪水によってもたらされたとみられる黄褐色砂の堆積が知られている。今回の調査でも層厚約 10~20cm の黄褐色砂の堆積が認められた。飯田市域の自然災害史の貴重な資料である。

(藤原直人)

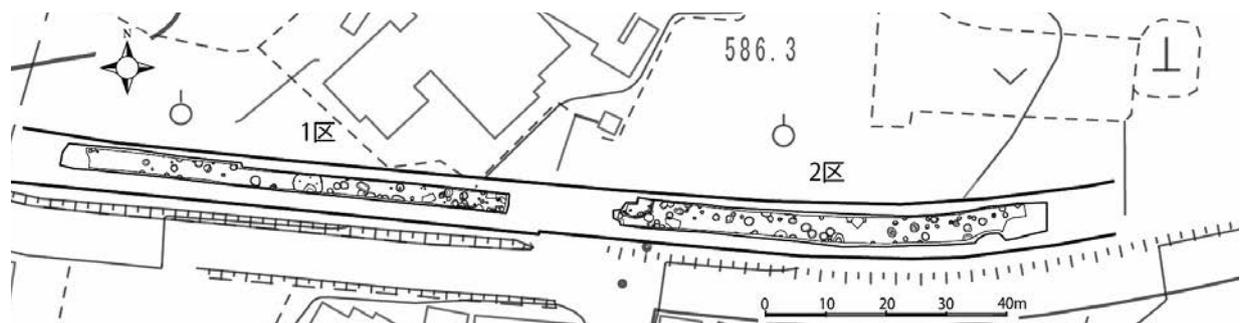


図 40 調査区と遺構配置図

Ⅲ 整理等作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	整理の内容（作業）	整理中の主な成果
やなぎさわいせき 柳沢遺跡	中野市	防災・安全交付金 （道路）事業 一般県道中野飯山線	報告書の印刷製本・刊行	縄文時代中期から後期の集落跡、弥生時代中期から後期の集落跡・水田跡、平安時代の集落跡・水田跡、中世以降の水田跡が確認された。報告書の総括では発掘調査の全容がわかるように努め、築堤地点の遺物群を併せて掲載し、時代ごとに概要をまとめた。
こじま やなぎはらいせきぐん 小島・柳原遺跡群	長野市	一般国道18号 （長野東バイパス） 改築工事	遺構図版組、遺物実測および トレース、写真撮影、遺物図 版組、各種計測、観察表作成、 原稿執筆、報告書の印刷製本・ 刊行	X線CT観察により、塔鏡形合子の竜舎上面の様子は、雲状曲線が極細沈線で3か所に刻まれることが判明した。製作技法等が一鑄で製作されたのか、部位をそれぞれ鑄造して組立てた別鑄の製作かは確定できなかった。国内の類例との比較により、日光男体山出土品1と4の間に位置付けられた。塔鏡形合子を出土した竪穴建物跡が廃棄された下限は10世紀後半と考えられ、製作時期はこれ以前と考えられる。
しおごきいせきぐん 塩崎遺跡群	長野市	一般国道18号 （坂城更埴バイパス） 改築工事	遺構図のデジタルトレース、 図面整理、土器接合・復元、 石器・土器実測、石器計測、 骨の鑑定指導	土器所見を中間報告する。弥生時代前期末～中期初頭土器群では、壺には条痕文系、遠賀川系、縄文沈線文系の3系統、甕には無文・細密条痕甕がある。弥生時代中期後半の土器には、栗林1式と3式がある。弥生時代後期には箱清水式とともに、北陸系土器が認められ、本遺跡周辺の遺跡からも出土している。飛鳥～奈良時代の土器については、畿内型の土師器坏が確認でき、円面硯が合計5点となった。平安時代の土器では、東信、北信など複数地域の甕が認められる。
はせつるさきいせきぐん 長谷鶴前遺跡群	長野市	一般国道18号 （坂城更埴バイパス） 改築工事	遺物整理・実測、遺構・遺物 実測図のトレース	中世居館に関連する堀跡から出土した、箱状の木製品の洗浄および解体作業を進めたところ、3面にみられる宝珠形の刳り貫き、筒状を呈する木製品という特徴から、「三方（筒胴）」と判断された。類例として、鳥根県高浜I遺跡出土の三方の筒胴がある。本遺跡の居館が機能していたと考えられる、室町～戦国期とほぼ同時代の居館跡が確認された遺跡である。
ちけいせき 地家遺跡ほか	佐久市	中部横断自動車道 建設事業	遺構図の修正、デジタルトレース、 図版組、遺物実測・トレース・ 図版組、写真撮影・図版組、 出土骨の鑑定、原稿執筆、報 告書の印刷製本・刊行	佐久市桜井・伴野地区、大沢地区、小宮山・前山地区、臼田地区、佐久穂町の5分冊31遺跡の報告書を刊行した。旧石器時代の高尾A遺跡、満り久保遺跡、縄文時代前期集落の小山の神B遺跡、弥生時代後期から古墳時代前期の集落と周溝墓群を検出した北裏遺跡群、高尾古墳群5号墳、尾垂古墳、兜山古墳、平安時代の山棲み集落の尾垂遺跡、上滝・中滝・下滝遺跡、中世寺院と墓地にかかわる多数の石造塔と木製品を出土した地家遺跡など、多様な遺跡を報告した。

やなぎさわ いせき
(1) 柳沢遺跡

防災・安全交付金（道路）事業
一般県道 中野飯山線

県道地点の調査対象地（6,930㎡）は、弥生時代青銅器埋納坑が検出された千曲川替佐・柳沢築堤事業の発掘調査区（築堤地点）に隣接する。発掘作業・整理作業は2016～2018年度実施し、本年度は印刷・製本業務のみを行い、9月に報告書を刊行した。

本遺跡では縄文時代中期から後期の集落跡、弥生時代中期から後期の集落跡と水田跡、平安時代の集落跡と水田跡、中世以降の水田跡を確認した。その他、出土数は少ないが、古墳時代の土器が広範囲に出土した。

報告書の総括では、柳沢遺跡の発掘調査の全容がわかるように努め、築堤地点の遺物群を合わせて掲載し、時代ごとに概要をまとめた。

柳沢遺跡の発掘調査は、前述の築堤地点と今回の県道地点のみであり、遺跡の西縁に沿って大きくトレンチ調査をした形となっている。

中野市教育委員会が遺跡内の斜面地で確認調査を行っているが、遺構・遺物はほとんど確認されていない。

一方、畑の耕作や住宅の建て替え工事で遺物が出土していることがわかっており、柳沢地区に保管されている遺物もある。これらの資料を総合的に調査することにより、本遺跡の全容の理解が進むことを望みたい。

（鶴田典昭）



図 41 柳沢遺跡概略図

こじま やなぎはらい せきぐん
(2) 小島・柳原遺跡群

一般国道 18 号（長野東バイパス）改築工事

昨年度から本格整理作業を開始し、本年度は、遺構図版組、遺物（石器・石製品・金属製品・木製品）実測およびトレース、写真撮影、遺物図版組、各種計測、観察表作成、原稿執筆、報告書作成を行った。また、県立歴史館において一部金属製品の応急的保存処理も実施した。

本遺跡群は本年度末に報告書を刊行し、それをもって本報告とする。年報では、報告書に記載した塔鏡形合子の分析の一部を要約して記載する。

とうまりがたごうす
塔鏡形合子の分析

(1) 経緯

塔鏡形合子は、調査初年の 2016 年 10 月 7 日に堅穴建物跡埋土より出土した。当初、重なる円盤状の突起を持つ銅製品の用途も名称もわからなかったが、栃木県日光男体山山頂遺跡出土品、法隆寺献納物や正倉院宝物の仏具（香合）に類似することが判明した。遺物名を「塔鏡形合子」、その蓋であると結論付けた。国内遺跡出土品としては 2 例目、先端の一部を欠損するが良好な遺存状態であることなどの希少性から、遺跡調査指導委員会を設置し、指導、助言を受けながら、調査分析を実施した。

(2) 器形の特徴

宝珠を除く高さ 6.3cm、口径 7.8cm、最大径 8.2cm、竜舎直径 1.6cm、相輪直径上段 2.6cm、中段 3.1cm、下段 3.5cm、基壇上部直径 3.9cm、重量 97.2g を測る（図 42）。厚さは 0.07~0.20cm で、1mm に満たない部分がある。他には次のような特徴がある。

- ①先端の宝珠を欠くが、形状を損なう歪みや大きな欠損はみられない。
- ②上面からみると、相輪・基壇・身本体は同心円を呈する（図 43）。
- ③相輪外縁と相輪上面の刻線は同一角度の線上に並ぶ（図 44）。
- ④相輪 3 段は、刹から縁辺に向けてわずかに上向きになる。



図 42 小島・柳原遺跡群出土塔鏡形合子 蓋

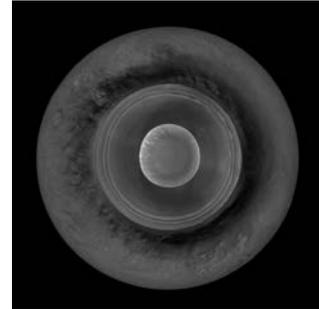


図 43 塔鏡形合子 上から

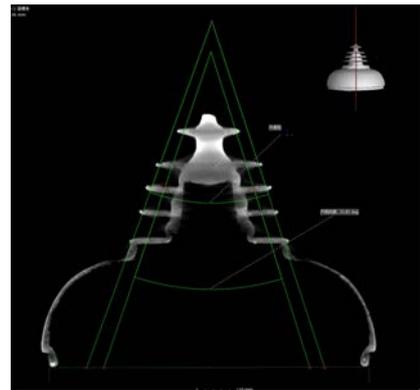


図 44 土塔鏡形合子 厚さ・角度

- ⑤蓋本体の厚さは均一ではなく、上が薄く、下になるほどやや厚くなる（図 44）。

(3) 模様

竜舎上面、相輪 3 段各上面、基壇上面、蓋本体外面で確認できる。竜舎上面の模様は X 線 CT 観察で判明した。雲状曲線が極細沈線で 3 か所に刻まれる。その内側は極細の短い沈線が、外側は三角形の刻み確認できる（図 45・46）。相輪 3 段と基壇の上面には、凹線による同心円 2 本が刻まれる。また、蓋本体外面には基壇直下と真ん中あたりに 2 本で 1 単位となる沈線、身との接合部分直上に沈線 1 本がある。

製作技法等の検討

基本的には、鑄造後ロクロ挽きによって仕上げ

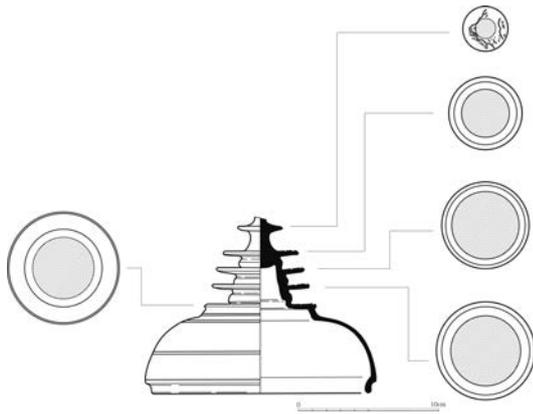


図 45 塔鏡形合子 竜舎・相輪・基壇上面の模様



図 46 竜舎の模様

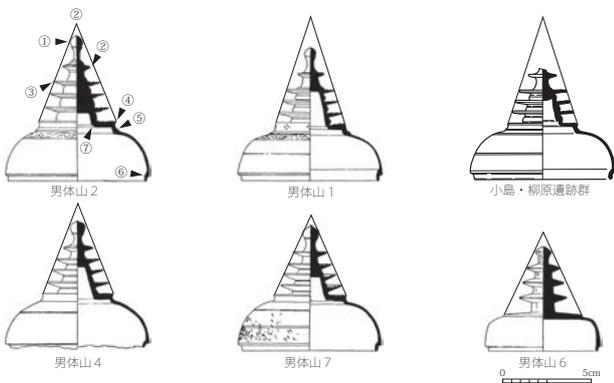


図 47 類例との比較

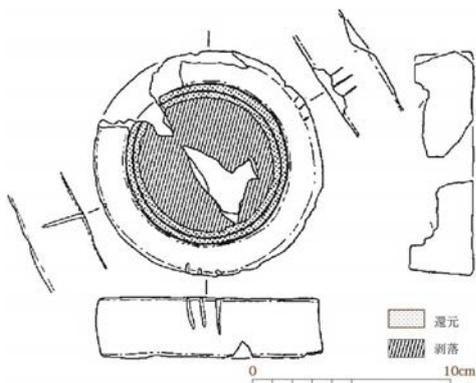


図 48 宮脇遺跡出土 塔鏡形合子鑄型

ていると考えられる。相輪部分の内面に鋌止めのような痕跡があるが、X線CT画像観察の結果、鋌止めで相輪上部を固定していないことが判明している。一鑄で製作されたのか、部位をそれぞれ鑄造して組立てた別鑄で製作されたのか、この点については蓋本体・基壇上面・相輪部分で分割して鑄造して組み合わせた可能性もあるが、確定するには至らなかった。現段階では、一鑄、別鑄どちらの可能性もあるという見解にとどまる。

類例との比較

国内で知られている類例は、古いものから法隆寺塔鏡、正倉院宝物合子、日光男体山出土品と考えられている。本遺跡出土品は、日光男体山出土品のうち相輪3段をもつ蓋5点(男体山1・2・4・6・7)と類似する。これらを比較し、器形の変化を7か所に注目し、検討した結果、本遺跡出土品は、日光男体山出土品1と4の間に位置付けられるという結論に至った(図47)。

小島・柳原遺跡群出土塔鏡形合子の位置付け

本遺跡群出土品は、9世紀後半から10世紀後半の土器が出土する竪穴建物跡の埋土から出土している。竪穴建物跡が廃棄された下限は10世紀後半と考えられ、製作された時期は、これより前といえる。

また、塔鏡形合子は類例が少ないため比較研究では制約があるが、遺跡の遺構内から出土したという出土状況が判明していることは重要といえよう。

埼玉県富士見市宮脇遺跡では、塔鏡形合子の鑄型が出土しており、古代仏教に係る仏具等が畿内からの持ち込みだけでなく地方でも製作していたことは間違いない(図48)。本遺跡例は、地方での仏教の在り方を考える資料となる。

(寺内貴美子)

図版引用:

日光二荒山神社 1963『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告書』
角川書店(名著出版再刊1991)一部加筆
埼玉県富士見市教育委員会 1993「第3章 宮脇遺跡第17地点」
『富士見市内遺跡I』富士見市文化財報告第43集 一部加筆

X線CT画像提供元:

奈良国立博物館(図43・44)
公益財団法人 元興寺文化財研究所(図46)

しおぎきいせきぐん
(3) 塩崎遺跡群

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）改築工事

本遺跡群は、千曲川左岸の自然堤防上に立地する弥生時代～中世の複合集落遺跡で、2013～2017 年度に発掘調査を、2016 年から整理作業を実施している。これまでに下表のように弥生前期末～平安時代に至る数多くの遺構を検出した。

遺構の種類	総数	時期
竪穴建物跡	471	弥生中期～平安
溝跡	98	弥生～奈良
墓跡	93	弥生前期末～平安
土坑	2,296	弥生前期末～中世
井戸跡	92	弥生中期～中世

検出遺構数（2017 年までの合計数）

本年度は、昨年度に引き続いて、遺構図のデジタルトレースと図面整理、土器接合・復元作業、石器・土器実測、石器の計測、骨の鑑定指導を実施した。本年度整理作業で得られた土器所見を中心に中間報告として紹介する。

塩崎遺跡群の遺構時期

現在、出土土器の約半分の接合作業を終了し、遺構時期を確定する作業を続けている。遺構は弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代中期中葉、弥生時代中期後半、弥生時代後期前半、弥生時代後期後半、古墳時代前期、古墳時代中期、古墳末～奈良時代、平安時代前期、平安時代末期～中世の各時期のものが確認され、遺跡は断続的ながら長期にわたる。

なお、本遺跡群では弥生時代前期末～中期初頭、



図 49 厚口鉢

弥生中期中葉、平安時代末期以後では竪穴建物跡がみつからない。弥生時代前期末～中期初頭の遺構は円形貯蔵穴や土器棺再埋葬のみだが、煮沸具の甕の出土からも居住の可能性はある。これまで指摘されているように平地式建物跡と浅い竪穴建物跡が中心で痕跡が残らなかったと考えられる（小林 2004）。また、弥生中期中葉も木棺墓のみだが、木棺墓は数基からなる小群が帯状に分布し、集落に付随した墓域の可能性はある。平安時代末期以後は溝跡と井戸跡数基のみで、掘立柱建物跡は確認できていない。

弥生時代前期末～中期初頭の土器群

本遺跡群で本格的な活動が確認されるのは弥生時代前期末～弥生中期初頭である。当該期の土器は土器棺再埋葬や円形貯蔵穴、後代の遺構に混在して出土した。

壺は条痕文系、遠賀川系、縄文沈線文系の 3 系統がある。

条痕文系土器は、花崗岩地帯の長石粒を多く含む胎土の東海産と考えられるもので、丸子式壺も出土した。条痕文系土器は当地域で製作されたものもあるとみられるが、詳細をつかめていない。今後の課題である。また、北信ではこれまで出土が知られていない厚口鉢も数点出土した（図 49）。

遠賀川系壺は隆帯や平行沈線のみを簡素な装飾で、外反口縁で胴部上部～中位に最大径がある器形である。胎土から搬入品とは考えられず、東海の影響を受けた当地域の土器と推測する。ミガキ調整が主体だが、ハケ状工具で調整された土器がある。詳細な位置づけは今後検討が必要である。



図 50 埴輪

縄文沈線文系壺は多くないが、やや細く短い直立ぎみの口縁がつき、肩部に縄文沈線文が施される。また、搬入品の灰白色胎土で、体部下半にタテ沈線と綾杉沈線を施す土器片が出土した。

甕は無文・細密条痕甕がある。他に口唇部に刻みを有し、胴部はタテハケ調整で頸部直下に平行沈線を数条施す遠賀川式甕に類似した小片も出土している。条痕文系の甕は把握しきれていない。

弥生中期後半の土器

栗林式土器にあたるが、本遺跡では栗林1式と栗林3式頃の土器がある。

栗林1式の土器は長方形の土坑や竪穴建物跡から出土した。壺は櫛描文と縄文を組み合わせたもの、櫛描文を主体とした文様があり、甕はヨコ羽状文を主体に波状文・横線とタテ櫛描文を組み合わせたものが少量ある。用いられる櫛描文工具の櫛歯は太く、破片では条痕文系の土器との識別に迷うものも多い。また、沈線をユビナデで施文する土器片、短斜櫛描文を多用する栗林1式でも古い時期とみられる破片が出土している。

栗林3式土器は竪穴住居跡から比較的多く出土した。壺は頸部中心に文様が施され、口縁内面を赤彩したものが少量ある。頸部の文様は縄文地文に平行沈線と山形沈線文を加えたものが多いが、連続弧状沈線にタテ刺突文を加えた簾状文にみえるものや平行沈線と波状文で構成されたものがある。甕はタテ羽状文主体で、波状文、波状文・羽状文・コ字重文がある。

弥生時代後期の土器

箱清水式土器は櫛描波状文甕と赤彩された壺・鉢・高坏を特徴とし、そのなかにハケ調整を用いる甕、赤彩器台や高坏、ミガキ調整の長頸壺、器台、壺等の北陸系土器がある（口絵）。一部の竪穴建物跡から出土し、出土土器も小片が多いが、周辺の石川条里遺跡、篠ノ井遺跡群、鶴前遺跡でも出土している。本遺跡周辺地域の複数集落で北陸との交流があったことがうかがえ、今後は、搬入時期や器種の差異を整理する必要があると考える。

古墳時代中期の土器

当該期の遺構は古墳周溝と数軒の竪穴建物跡か

ら出土した。馬骨が出土した古墳周溝 SM1009 からは、内面黒色処理した内湾体部から口縁が屈曲外反する高坏が多く出土し、本遺跡に近い長野市教育委員会調査地点の篠ノ井遺跡群で確認された古墳とほぼ同時期とみられる（長野市教委 2007）。当期では自然堤防上に集落と古墳がセットで構成されるグループが散在していたとみられる。また、古墳周溝 SM1020 からは底部穿孔された長胴甕に似た埴輪が出土した（図 50）。この埴輪の時期の詳細は今後の課題である。

飛鳥～奈良時代の土器

当該期の竪穴住居跡は多くある。これまで円面硯は中空円面硯を含めて3点確認し、本年新たに整理中に2点がみつかると合計5点となった。また、内面に放射状暗文を施す畿内型の土師器杯の出土が確認できた。

円面硯は本遺跡に隣接する篠ノ井遺跡群の複数地点から合計5点出土し、今回発見されたものを加えると塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群の広範囲で出土していることになり、文書作成にかかわる複数の人物が分散していたとみられる。

平安時代の土器

竪穴建物跡と溝跡、井戸跡があるが、集落は9世紀が中心で、食膳具は黒色土器、須恵器を中心に、灰釉陶器が少量ある。甕はケズリ調整の東信中心に分布する甕と、タタキ調整後にケズリ調整する砲弾形の北信に分布する甕、少片で器形不明ながらハケ調整の甕が少量あり、複数地域の甕が認められる。この様相は、奈良時代後半とみられる底部ヘラ切・ナデ調整と回転糸切調整の須恵器杯が混在する時期から認められる。奈良時代後半頃から平安時代前期を中心に甕が広域に流通していたとみられる。

来年度以降も整理作業は継続する。今後も様々な観点から整理を進めていきたい。

（市川隆之）

参考文献：

小林青樹 2004 「弥生再葬墓にかかわる集落と居住システム」

『考古学ジャーナル』524 ニューサイエンス社

長野市教育委員会 2007 『篠ノ井遺跡群（6）』

(4) ^{はせつるさきいせきぐん}長谷鶴前遺跡群

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）改築工事

本遺跡群は、2017・2018 年度に発掘作業を実施し、平安時代から明治時代にわたる水田跡・堀跡・道路跡・工房跡などの各遺構と、該期の遺物を確認した。

昨年度までに出土遺物の接合および復元作業が終了しており、本年度は出土遺物の整理・実測作業、遺物実測図および遺構図のデジタルトレース作業を実施した。

居館における神事の痕跡か？

本遺跡群の調査では、明治時代の焼物および窯跡に関連する遺物はその出土量の大半を占めるが、木製品も複数出土している。整理作業を進める中で、室町～戦国時代の居館に関連するとみられる堀跡（SD40）から出土した「箱」状の木製品について、以下のようなことがわかってきた（口絵・図 51）。

発見時には、板が 4 面めぐっている状況が確認できたため、「箱」状の製品であると考え、年報 34 でも報告している。「箱」であれば底板や蓋が存在していたはずだが、調査範囲内の堀跡の埋土中からは、そのような木製品は確認できなかった。「箱」状製品は脆弱性が高いものであったため、現場での観察および内容物の確認については最小限にとどめ、土ごと取り上げを行って現場から持ち帰ることとなった。

整理作業において洗浄および解体作業を進めたところ、「箱」の中に含まれる土は水平堆積をしていることがわかり、本製品が堀跡に廃棄などされた時点で開口していたものであると判断した。また、洗浄の結果、外面には宝珠のような形の意匠（口絵）が 3 面のみにみられ、各板材の上下端部はきれいに整えられていることから、底板などが取り付けられていなかったことも観察できた。つまり、「箱」だと思われていた木製品は、「筒」状の製品であることが判明したのである。また、内面には板を筒状に加工するために、縦方向の刻

みを複数施していることもわかった。

全面ではなく 3 面にみられる宝珠形の削り貫き、筒状を呈する木製品という特徴から、現代でも神事などで使用されている「三方」に非常に似ていることが判明した。三方は、「筒胴」と呼ばれる台と、神饌などを載せる盆の「折敷」を組み合わせたものである（図 52）。発掘調査の出土品としては、鳥根県出雲市高浜 I 遺跡で三方の筒胴が出土している。高浜 I 遺跡は、長谷鶴前遺跡群の居館が機能していたと考えられる時代（室町～戦国時代）とほぼ同時代の居館跡が確認された遺跡で、三方は廃棄土坑から出土している。形状や製作技法に共通点がみられることから、長谷鶴前遺跡群で出土した木製品も「三方（筒胴）」であると判断できる。

現段階では長野県内の出土事例は確認できず、県内唯一の事例である可能性が高い。今後も類例の確認、居館における用途、保存処理の検討などを進めていく必要がある。（柴田洋孝）



図 51 出土した三方

【三方（さんぼう・さんぼう）】

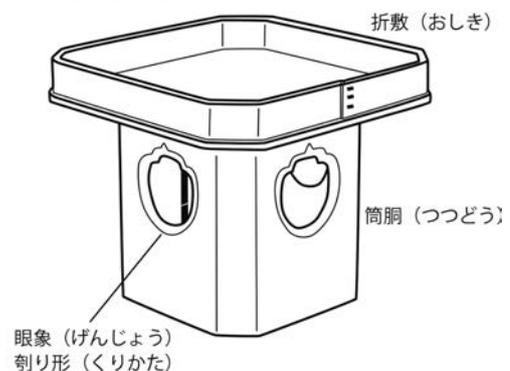


図 52 現代の一般的な三方と各部名称

弥生時代

大規模な遺跡は、佐久盆地北部の千曲川に沿いにある自然堤防や段丘、比較的平坦な丘陵台地にあり、山間部にはほとんどない。段丘や丘陵上では、佐久市北裏遺跡群が拠点集落の一つとされる。今回、佐久市北裏遺跡群、西東山遺跡、和田遺跡などで集落跡を、佐久地域の山間部にある岩陰遺跡として月明沢岩陰遺跡群を調査した。北裏遺跡群では、木棺上に多数の土器を供献し火をかけた後期の木棺墓を佐久地方独特の儀礼と考えた。和田遺跡では、南斜面中腹に後期後半の竪穴建物跡2軒を検出した。隣接する南西側の佐久市教育委員会の成果を含め、南斜面中腹に集落域が帯状に広がる様相がわかってきた。

月明沢岩陰遺跡群については、今回の用地内では岩陰遺跡は残存していないと判断した。北畑遺跡群では石鍬がまとまって出土し、生産域を推測させるが、この時期の石器利用を考えるうえでも貴重な成果といえる。

古墳時代

佐久地域では前期の遺跡数は減少し、集落の規模も小さく、中期以降その数が増してくる。

和田遺跡では、南斜面中腹に弥生時代後期末から前期前半の竪穴建物跡2軒を検出した。上滝・中滝・下滝遺跡で前期の竪穴建物跡2軒、滝遺跡でも前期の竪穴建物跡2軒を検出した。いずれも小規模な集落跡といえ、生活を支えた生業がどのようなものか、検討すべき課題と考える。

前の久保遺跡では古墳時代前期前葉の竪穴建物跡1軒を調査したが、佐久市域における該期の集落動向を示す事例として報告した。

北裏遺跡群では、前期に至り10mを超え一隅が切れる方形周溝墓、前期後半には前方後方形の大型周溝墓が築かれる。また、高尾古墳群5号墳、尾垂古墳、兜山古墳ともに新発見の古墳である。これらの築造年代は7世紀から8世紀にかけてと推測した。小型の横穴式石室を内部主体とすること、追葬がなされていることが共通している。山裾に築かれた「山寄せ」古墳として、古墳の発見例の少ない千曲川左岸地域の地域動向を考える新

資料として評価した。

古代

佐久市小山の神B遺跡、上滝・中滝・下滝遺跡、地家遺跡、寺久保遺跡、佐久穂町小山寺窪遺跡、馬越下遺跡などで集落跡を調査した。

寺久保遺跡では竪穴建物跡1軒を検出した。佐久平南部では山間部で平安時代後期に小規模集落（山棲集落）が発見されているが、その成立要因は明確にできなかった。一方、上滝・中滝・下滝遺跡では竪穴建物跡15軒を検出した。7～9世紀にかけての継続した集落である。立地は尾根を背後にした狭小な河岸段丘上で、農耕以外の生業を、出土遺物から想定を試みた。

小山の神B遺跡、尾垂遺跡で9～10世紀の集落跡を調査した。洞源遺跡の製鉄炉跡は佐久地域では初の事例である。報告した3基の製鉄炉跡は年代測定の結果から10～12世紀に築かれたと推測した。古代における生産遺跡として希少な成果と考える。馬越下遺跡では竪穴建物跡3軒を調査し、甲斐型甕が出土した。北畑遺跡群では、水田跡を報告した。

中世以降

周辺遺跡のうちほぼ半数が城跡・砦・狼火台で、今回調査した荒城跡もその一つである。佐久市地家遺跡・尾垂遺跡は寺院関連遺跡、佐久市北裏遺跡群・佐久穂町奥日影遺跡・小山寺窪遺跡などは集落遺跡として報告した。一方、庚申塚、和田1号塚、田島塚、水堀塚は、いずれも尾根上にあり、眺望のよい位置にある。事例の乏しい「塚」調査として貴重な資料を提示できた。

地家遺跡の木製品、石造物など地域における第一級の資料を報告できた。また、尾垂遺跡では、青磁等の中世陶磁器や仏具の「馨」が出土し、時期不明の礎石建物跡を考慮すると「寺」の存在も推測される。荒城跡では小規模な郭の存在を想定したが確認できなかった。北裏遺跡群では、馬小屋跡、井戸跡とピット群の集中箇所を検出した。

以上、今回の調査で地域の歴史解明に新たな資料を提示できた。今後この調査成果が生かされることを期待したい。（岡村秀雄）

Ⅳ 普及公開活動の概要

	分類	名称	場所	期日	参加者数(名)
①	施設公開	夏休み考古学チャレンジ教室 2019	センター	8/2～3	210
	現地説明会・見学会		浅川扇状地遺跡群	7/7	107
			石川条里遺跡	7/13	70
			沢尻東原遺跡	8/5	17
			沢尻東原遺跡	9/21	256
②	速報展	長野県の遺跡発掘 2019	県立歴史館	3/16～6/23	12,975
		長野県の遺跡発掘 2019	平出博物館	7/27～9/16	1,545
		長野県の遺跡発掘 2019	飯田市美術博物館	10/27～11/10	2,449
		県庁ロビー展	長野県庁	11/5～15	—
③	講座 出前授業	考古学からわかる日本の歴史※	篠ノ井老人福祉センター	5/16	12
		古代人の生活にふれよう※	浅川扇状地遺跡群	6/20	12
		信越国境の縄文遺跡※	篠ノ井老人福祉センター	7/18	12
		種々実が出土した縄文遺跡※	篠ノ井老人福祉センター	8/29	12
		コト作りを始めた頃の弥生遺跡※	篠ノ井老人福祉センター	9/19	12
		雅な宝物が出土した古代遺跡※	篠ノ井支所	10/17	12
		国宝に指定された土偶たち※	長野県立歴史館	11/7	12
		千曲川大水害と古代の遺跡※	篠ノ井支所	12/19	12
		縄文・弥生土器を観察する	長野市信州新町小学校	5/8	16
		縄文・弥生土器を観察する	松本市立田川小学校	5/9	59
		古代のくらしと道具の移り変わり	長野市立安茂里小学校	6/21	60
		勾玉づくり、縄文編物づくり	長野市立篠ノ井東中学校	9/27	44
		考古学入門	長野日本大学高等学校	4/20	20
		古代史入門	長野日本大学高等学校	7/8	20
	発掘体験	辰野町立辰野南小学校	沢尻東原遺跡	6/19	28
		辰野町立辰野南小学校	沢尻東原遺跡	7/23	21
		辰野町立川島小学校	沢尻東原遺跡	9/5	20
	職場体験	長野市立川中島中学校	センター・石川条里遺跡ほか	7/17～18	3
		長野市立篠ノ井東中学校	センター・石川条里遺跡ほか	7/17～18	3
		長野市立広徳中学校	センター	7/19	3
		長野市立篠ノ井西中学校	センター・石川条里遺跡ほか	8/21～22	3
		長野県立小諸高等学校	センター、石川条里遺跡	10/24	10
	④	施設利用		展示室	4/1～2/28
			図書室	4/1～2/28	62
総計					18,380
国補対象計					1,258

※は篠ノ井老人福祉センター生きがづくり講座（全8回）

◎上記の内、太字の普及公開活動は、文化庁「地域の特色ある埋蔵文化財補助事業」を活用して実施した。

(1) 施設公開

夏休み考古学チャレンジ教室 2019 の開催

実施日：8月2日（金）午後1時～4時

8月3日（土）午前9時～午後3時

目的：

夏休みの期間中に、図書室や展示室などの施設を広く一般公開し、実際の整理作業を見学してもらい、あわせてその作業を親子で体験してもらうことで、埋蔵文化財に対する理解をより深める。

内容：

- ・展示室と図書室の公開…出土品の展示、文化財や考古学の質問に回答、報告書や関連図書の紹介と自由研究へのアドバイス
- ・整理作業の見学と体験…土器の接合・復元、遺物の実測・拓本、実測図のデジタルトレース、土器ペーパークラフトの作成

来場者数：210名

2日（金）85名、3日（土）125名

11回目となる本年度は、長野県立歴史館の協力を得て、土器ペーパークラフトの新ブースを設けて開催した。地元の篠ノ井・川中島地区をはじめとする長野市と千曲市の小学生とその保護者が来場者の中心であったが、遠く東京都や愛知県からの来場者もみた。リピーターも多く、この催しが地域に根付いていることがうかがわれた。

すべてのブースを回って、熱心に体験する人が多く、なかでも作品を持ち帰ることのできる体験コーナーの石膏型取りや土器の拓本、土器ペーパークラフトなどに人気があった。

また、本年度は記念品の特製クリアファイルとうちわを配布し、好評を得た。

来場者へのアンケートでは、土器復元や土器接合、土器実測のコーナーの人気が高かったが、「すべてよかった」、「面白かった」、「楽しめた」、「勉強になった」、「毎年楽しみにしている」など好意的な感想が多かった。

（上田 真）



図 54 出土品の展示



図 55 土器の拓本体験



図 56 自由研究へのアドバイス



図 57 ペーパークラフト作成体験

(2) 現地説明会・見学会

現地説明会・見学会は、3遺跡で実施した。参加者は延べ450人であった。

○浅川扇状地遺跡群（長野市）

開催日：7月7日（日） 見学者107名

古墳時代・平安時代の竪穴建物跡や中世の居館の堀跡を公開した。古墳時代から平安時代へと時代が進むにつれ、炉がカマドへと変化するという住居の構造の移り変わりを目にして、当時の生活の様子や変化について興味をもって見学していた。あわせて、今年度の発掘調査でみつかった土器などの出土品に加えて、赤彩された二段口縁壺や東海地方の特徴を持つ高坏など、昨年度までの出土品や調査の写真パネルも展示した。「展示されている土器は、灰色やオレンジ色といった色の違いがあるが、作り方が違うのか。」など、焼き物の種類や製法についての質問が多く寄せられた。



図58 浅川扇状地遺跡群の現地説明会

○石川条里遺跡（長野市）

開催日：7月13日（土） 見学者70名

千曲川の洪水で埋まった平安時代の水田跡と洪水後の復旧痕跡を中心に公開した。洪水砂に覆われた水田跡では盛り上がった畦、畦によって区切られた区画ごとに様子が異なる水田面、水田面に残されたくぼんだ足跡などが当時のまま見つかったことに驚きをもって見学していた。また、洪水によって堆積した砂の厚さや、洪水後も同じ場所で復旧しようと畦を探そうとした当時の人々の努力に感心していた。「水田面の違いが耕作時

のどのような理由によるものか」、「畦の下に埋められていた木材は何のためか」など、当時の水田耕作に関する質問が寄せられた。説明会では出土した土器や木製品の他、同一事業で調査した塩崎遺跡群・長谷鶴前遺跡群の出土遺物や発掘調査の写真パネルなども展示した。



図59 石川条里遺跡の現地説明会

○沢尻東原遺跡（辰野町）

開催日：9月21日（土） 見学者256名

8月5日の見学会に続いて、縄文時代中期の竪穴建物跡や発掘作業の様子を公開した。竪穴建物跡は、作業の状況が分かるように、プラン検出→トレンチ掘削→遺物出土状況→完掘と各段階の調査状況を公開し、わかりやすいと好評を得た。また、土器が大量に出土した竪穴建物跡では、その迫力に圧倒された方が多く、縄文時代の息遣いを感じると好評であった。あわせて、展示室では遺跡から出土した大形の土器や、土掘具の石器などを展示した。出土品を間近に見た見学者は、縄文人の仕事の精緻さに驚いていた。

（西 香子 廣瀬昭弘）



図60 沢尻東原遺跡の現地説明会

(3) 速報展

○長野県の遺跡発掘 2019

内容：長野県立歴史館の巡回展『長野県の遺跡発掘 2019 - 時代を映す“匠”の技 -』に共催し、テーマ展示のひとつである「長野県埋蔵文化財センター調査遺跡」コーナーで調査成果の展示を行った。今回は、浅川扇状地遺跡群（長野市）と上滝・中滝・下滝遺跡（佐久市）の出土品等の展示を行い、小島・柳原遺跡群、塩崎遺跡群、長谷鶴前遺跡群（以上長野市）、小山の神B遺跡（佐久市）については写真展示を行った。浅川扇状地遺跡群では古墳時代前期の土器を、上滝・中滝・下滝遺跡では平安時代の土器や陶器、土錘等を展示した。

また、長野県立歴史館での関連イベントであるミニシンポジウム「土器の登場 旧石器時代終末から縄文時代草創期の文化」には当センター職員もパネリストとして参加した。

巡回展は、北信会場となる長野県立歴史館からスタートし、中信会場の塩尻市立平出博物館と南信会場の飯田市美術博物館の3会場で3月～11



図 61 県立歴史館での展示



図 62 平出博物館での展示

月にかけて開催した。

期間と見学者は以下のとおりである。

○長野県立歴史館

3月16日～6月23日 見学者 12,975名

○塩尻市立平出博物館

7月27日～9月16日 見学者 1,545名

○飯田市美術博物館

10月27日～11月10日 見学者 2,449名

(櫻井秀雄)



巡回展 ポスター

(4) 県庁ロビー展・出土品展等

当センターでは発掘作業や整理作業の成果を県民の皆さんに広く紹介するために、様々な機会に展示会等を開催している。本年度は県庁ロビー展示を行った。

○生涯学習月間長野県庁ロビー展示

開催日：11月5日（火）～15日（金）

会場：長野県庁1階 玄関ホール

内容：沢尻東原遺跡（辰野町）のパネル展示

日頃の県の生涯学習に対する取り組みを紹介することを目的に行われた長野県教育委員会文化財・生涯学習課・生涯学習月間の展示に協力して、沢尻東原遺跡の調査状況を解説パネルと写真で紹介した。

(鈴木時夫)



図 63 県庁ロビー展示の様子

(5) 講座・出前授業・発掘体験

○篠ノ井老人福祉センター生きがづくり講座

内容 (全 8 回) :

- 「考古学からわかる日本の歴史」(5/16)
- 「古代人の生活にふれよう」(6/20)
- 「信越国境の縄文遺跡」(7/18)
- 「種や実が出土した縄文遺跡」(8/29)
- 「コメ作りを始めた頃の弥生遺跡」(9/19)
- 「雅な宝物が出土した古代遺跡」(10/17)
- 「国宝に指定された土偶たち」(11/7)
- 「千曲川大水害と古代の遺跡」(12/19)

当センターの最新の調査成果を時代ごとに解説する連続講座を行った。また、発掘体験や土器洗い体験のほか、県立歴史館で開催された「特別企画 土偶展」を見学した。



図 64 土器洗いを体験する

出前授業

○長野市信州新町小学校 5月8日(水)

内容:「縄文時代や弥生時代の遺物に触れて、古代のくらしを体感する」(1時間授業)

遺物の観察や教材用レプリカを使いながら、縄

文人や弥生人の気持ちを感じてみた。児童はとても元気で、熱がこもった率直な意見や感想に接することができた。

○松本市立田川小学校 5月9日(木)

内容:「縄文時代や弥生時代の遺物に触れて、古代のくらしを体感する」(45分授業、2回)

児童にとって、普段は博物館のケース越しにしか見ることができない縄文時代と弥生時代の遺物に直接触れ、質感や重量感を体験するとともに、使い方を考えた。自分が住んでいる地域周辺の遺跡の位置を確認し、身近に遺跡があることを知ってもらい、教科書や資料集では得られない地域の歴史を学ぶ機会になった。



図 65 熱心に聞く田川小の児童たち

○長野市立安茂里小学校 6月21日(金)

内容:「古代のくらしと道具の移り変わり」(45分授業 2回)

縄文時代から古墳時代の暮らしを画像で説明しながら、遺物やレプリカに触れる体験をした。青銅器のレプリカは関心が高く、銅鐸を鳴らしてみようとする児童も多かった。



図 66 本物の土器に触って観察

○長野市立篠ノ井東中学校 9月27日(金)

内容:「勾玉づくり、縄文編物づくり」(2時間)

篠ノ井東中の文化祭の体験メニューということで、勾玉づくりと縄文編物づくりが行われた。参加した生徒はそれぞれ製作に没頭し、集中力を切らさずに全員が完成させることができた。



図67 勾玉の削り出し

○長野日本大学高等学校 11月8・29日(金)

内容:「古代遺跡から何がわかるか」

① 古代史入門その1 (1時間)

縄文時代玉製装身具の考古学

② 古代史入門その2 (1時間)

シナノと東北アジア文化の古代学

入門その1では考古学の研究方法などを学び、研究の実践例として「縄文時代の玉製装身具研究」を発表した。その2では古代史とは何かを学び、律令国家の成立と変容について講座を行った。主に地歴部の生徒を対象とした本格的な講座であったが一般生徒の参加もあった。

(贅田 明)

発掘体験

○辰野町立辰野南小学校 6月19日(水)

内容:「発掘体験(沢尻東原遺跡)」(2時間)

参加者:6年生24名、職員4名

縄文時代の遺跡で発掘体験を行った。出土した土器や石器などの説明を受けながら縄文時代の生活などを学んだ後、発掘作業員とともに竪穴建物跡の発掘を行った。最初は恐る恐るだったが、次々と土器や石器をみつけ出していた。皆、夢中で発掘に取り組み、予定した時間はあっという間に過ぎていった。



図68 竪穴建物跡を囲んで学習

○辰野町立辰野南小学校 7月23日(火)

内容:「発掘体験(沢尻東原遺跡)」(2時間)

参加者:5年生19名、職員2名

6年生に続いて、5年生も夏休みの直前に発掘体験を行った。6年生同様に多くの土器を掘り出し、近くの水たまりで土器を洗い文様などを詳細に観察する児童もいた。また、石器が多く出土し、特に黒曜石の石器に目を輝かせながら掘っていたのが印象的であった。



図69 発掘体験1



図70 発掘体験2

○辰野町立川島小学校 9月5日(木)

内容：「発掘体験(沢尻東原遺跡)」(2時間)

参加者：全校児童11名、職員9名

降水確率が高く雨が心配される中で、全校児童11名が発掘体験をした。土器や石器をいくつも掘り出すことができたが、佳境に入ったところで降雨のため中断することになった。時間は短かったが、低学年から高学年までそれぞれ十分に遺跡を体感することができた。

(田中一穂)

(6) 体験学習用教材

○塔鉢形合子模造品製作事業

体験学習用教材として、小島・柳原遺跡群出土塔鉢形合子を元にした模造品一組(蓋と台脚付身)を国補事業で製作した。

本遺跡では台脚付身が出土していない。そのため、類例のなかでもっとも類似する蓋が出土した、日光男体山山頂遺跡出土品の台脚付身を参考にした。本来は、铸造後ロクロ挽きで作られたと考えられるが、今回は旋盤削り出しで製作した。

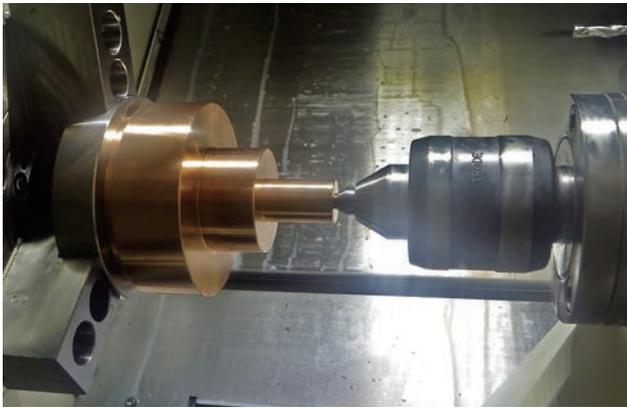


図71 模造品製作 旋盤加工

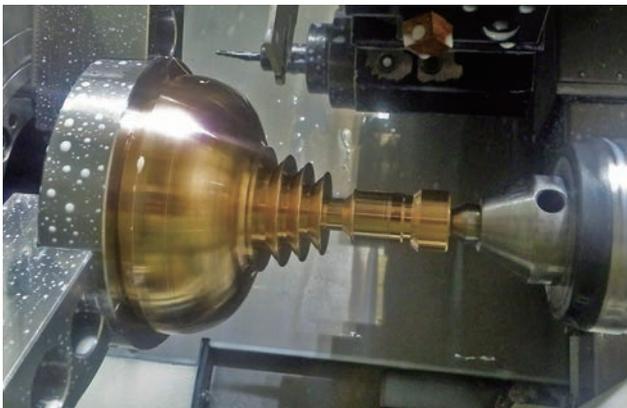


図72 模造品製作 旋盤加工2



図73 完成した模造品

出来上がった模造品は、今後展示や体験学習用教材として活用する予定である。

(寺内貴美子)

(7) 施設利用

○展示室

当センターでは発掘作業・整理作業を実施している遺跡の出土品等を展示し、一般公開している。展示については2回の展示替えを行い、本年度は283名の見学者をみた。



図74 展示室の様子1



図75 展示室の様子2

(8) 出版物

○長野県の埋蔵文化財情報誌『信州の遺跡』

【第14号】令和元年7月26日(金)発行

- ・最新報告書から(栄村ひんご遺跡、川上村梓久保金山遺跡、朝日村山鳥場遺跡、松本市エリ穴遺跡)
- ・最新調査成果から(小諸市 国史跡寺ノ浦石器時代住居跡、安曇野市 明科遺跡群明科廃寺)
- ・埋文ほっと情報 ほか

○教育普及誌

『かがみちゃんと学ぼう ジュニアこうこがく』

【第8号】令和2年2月23日(木)発行

- ・いつから人は信州にすんでいたの?
- ・旧石器時代の環境
- ・旧石器人は何を食べたの? ほか



信州の遺跡第14号



ジュニアこうこがく第8号

○報告書

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書121

- 『北畑遺跡群 仁東餅遺跡 北裏遺跡群 西東山遺跡 東山遺跡 中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6 佐久市内6』
- ・佐久市 桜井・伴野地区に所在する5遺跡の報告書
 - ・令和2年3月19日発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書122

- 『小山の神B遺跡 高尾A遺跡 高尾古墳群5号墳 尾垂遺跡 尾垂古墳 洞源遺跡 荒城跡 月明沢岩陰遺跡群 中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 佐久市内7』

- ・佐久市 小宮山・前山地区に所在する8遺跡の報告書
- ・令和元年9月30日発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書123

- 『地家遺跡 兜山遺跡 兜山古墳 大沢屋敷遺跡 前の久保遺跡 三枚平B遺跡 中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8 佐久市内8』
- ・佐久市 大沢地区に所在する6遺跡の報告書
 - ・令和2年3月19日発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書124

- 『滝ノ沢遺跡 寺久保遺跡 庚申塚 台ヶ坂遺跡 上滝・中滝・下滝遺跡 和田遺跡 和田1号塚 滝遺跡 家浦遺跡 田島塚 水堀塚 中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9 佐久市内9』
- ・白田地区に所在する11遺跡の報告書
 - ・令和元年9月30日発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書125

- 『奥日影遺跡 小山寺窪遺跡 上野月夜野原遺跡 満り久保遺跡 馬越下遺跡 中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10 佐久穂町内』
- ・佐久穂町内に所在する5遺跡の報告書
 - ・令和2年3月19日発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書126

- 『中野市 柳沢遺跡 一般県道中野飯山線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- ・中野市 柳沢遺跡の報告書
 - ・令和元年9月13日発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書127

- 『長野市 小島・柳原遺跡群 一般国道18号(長野東バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- ・長野市小島・柳原遺跡群の報告書
 - ・令和2年3月19日発行

○『長野県埋蔵文化財センター年報 36』

- ・2019年度の事業概要 ほか
- ・令和2年3月23日発行

(櫻井秀雄)

V 指導者招へい

期 日	所 属	氏 名	内 容
5月14日～16日 8月6日～9日 11月13日～15日 3月3日～5日	京都大学名誉教授	茂原信生	出土骨鑑定指導
5月14日～16日 8月6日～9日 11月13日～15日 3月3日～5日	獨協医科大学	櫻井秀雄	出土骨鑑定
5月29日	長野県教育委員会	谷 和隆	中部横断関連遺跡旧石器
5月31日	建設業労働災害防止協会 長野県支部	新保修司	熱中症予防
8月7日～9日 11月13日～15日 3月3日～5日	総合研究大学院大学	本郷一美	出土骨鑑定
8月6日～7日 3月4日～5日	日本大学松戸歯学部	五十嵐由里子	出土骨鑑定
6月3日	伊那谷自然の会	松島信幸	沢尻東原遺跡地形地質
6月3日	長野県文化財保護審議会	市澤英利	沢尻東原遺跡地形地質
6月19日 10月31日 12月18日	信州大学理学部	保柳康一	南大原遺跡調査
6月30日	小島・柳原遺跡群調査指導委員 長野県文化財保護審議会	市澤英利	小島・柳原遺跡調査
6月30日	小島・柳原遺跡群調査指導委員 元興寺文化財研究所	狭川真一	小島・柳原遺跡調査
6月30日	小島・柳原遺跡群調査指導委員 立正大学文学部	時枝 務	小島・柳原遺跡調査
6月30日 3月1日	小島・柳原遺跡群調査指導委員 奈良国立博物館	内藤 栄	小島・柳原遺跡調査 塔鏡形合子
6月30日 3月1日	小島・柳原遺跡群調査指導委員 宮内庁正倉院事務所	西川明彦	小島・柳原遺跡調査 塔鏡形合子
6月30日	小島・柳原遺跡群調査指導委員 京都美術工芸大学	村上 隆	小島・柳原遺跡調査
11月1日	信州大学理学部	保柳康一	千曲川洪水関係
12月3日～4日	大阪府立弥生文化博物館長	瀬戸田佳男	北裏遺跡群・南大原遺跡調査
12月18日	弥生文化研究者	小山岳夫	北裏遺跡群等調査
12月20日	長野県立歴史館	寺内隆夫	縄文時代土偶関係
3月4日～5日	元愛知県立陶磁美術館	仲野泰裕	長谷鶴前遺跡群調査

VI 会議・研修会への参加

(1) 会議・委員会等

期 日	内 容	出 席 者	場 所
4月9日	指導主事・専門主事会議	櫻井秀雄	長野保健福祉事務所
4月24日	三所会議、四者連絡会議	原田秀一以下7名	埋文センター
4月26日 1月30日	長野県文化振興事業団館長会議	原田秀一	ホクト文化ホール
4月26日	公共開発事業に伴う埋文保護会議	柴田洋孝 伊藤 愛	総合教育センター
5月9日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	平林 彰	新潟県長岡市
5月30日 7月26日 9月27日 3月24日	長野県文化振興事業団理事会	原田秀一	ホクト文化ホール キッセイ文化ホール
6月13日～14日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	原田秀一 平林 彰 岡村秀雄	山形県酒田市
6月30日	小島・柳原調査指導委員会	寺内貴美子以下4名	公益財団法人 元興寺文化財研究所
7月2日	文化財保護行政市町村担当者会議	柴田洋孝	長野保健福祉事務所
7月3日	副館長等会議	関崎修二	ホクト文化ホール
7月10日～11日	長野県文化財保護審議会 史跡・考古資料部会	原田秀一 平林 彰 岡村秀雄	長野県埋蔵文化財センター 飯田支所他
7月19日 12月6日	リニア中央新幹線関連埋蔵文化財 調整会議	岡村秀雄 川崎 保	飯田市役所
8月8日 1月7日 1月18日～19日	「長野県の土偶」研究会	綿田弘実 贄田 明	長野県立歴史館
8月22日 10月3日	国宝土偶展関係機関連絡会議	贄田 明	長野県立歴史館
10月24日～25日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部北陸 ブロック会議	関崎修二 川崎 保	石川県金沢市
11月21日～22日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	原田秀一 平林 彰	東京都埋蔵文化財センター
11月22日	黒曜石原産地等保有市町村連絡会議	川崎 保	長野県立歴史館
11月25日	令和2年度以降実施予定の公共事業等に 係る埋文保護協議	岡村秀雄	中央新幹線長野工事事務所
12月23日	令和2年度以降実施予定の公共事業等に 係る埋蔵文化財等の保護協議	平林 彰 岡村秀雄	飯田建設事務所
2月13日	令和2年度以降実施予定の公共事業等に 係る埋文保護協議	川崎 保 西 香子	長野建設事務所
2月18日	関ブロ埋蔵文化財行政担当者会議	櫻井秀雄	静岡市
2月20日	令和2年度以降実施予定の公共事業等に 係る埋文保護協議	平林 彰 櫻井秀雄	国土交通省長野国道事務所
2月21日	長野県近世城郭・城下町研究会	河西克造	上田市

(2) 研修会・資料調査等

期 日	内 容	参加者・調査者	場 所
4月20日ほか	普通救命講習	柴田洋孝ほか調査部職員	篠ノ井消防署ほか
4月22日	公社公団新採研修	村井大海 高野和子	県庁
5月8日～9日	防火管理講習	鶴田典昭	長野市生涯学習センター
7月5日	メンタルヘルス研修会	川崎 保	総合教育センター
7月26日	パートタイム・有期雇用労働法セミナー	関崎修二	長野市若里市民文化センター
7月13日～14日	飛鳥時代の土器編年再考シンポジウム	上田 真 柴田洋孝	奈良文化財研究所
8月21日～23日	全国埋蔵文化財担当者講習会	綿田弘実 村井大海	札幌市
9月17日～20日	文化財担当者専門研修 「堆積・地質学基礎課程」	村井大海	奈良文化財研究所
9月27日	人権啓発講座及び人権啓発推進員研修会	関崎修二	ホクト文化ホール
9月30日～10月4日	文化財担当者専門研修 「出土木器調査課程」	柴田洋孝	奈良文化財研究所
10月18日	長谷鶴前遺跡群出土品にかかる資料調査	柴田洋孝	有限会社松代 松代陶苑
11月11日～14日	学芸員専門研修アドバンスト・コース 人類コース	柴田洋孝	国立科学博物館
11月14日～15日	関東甲信越静地区埋蔵文化財担当者等 研修会	櫻井秀雄 村井大海	水戸市
11月25日～12月5日	文化財担当者専門研修 「文化財写真課程」	伊藤 愛	奈良文化財研究所
12月5日～12日	文化財担当者専門研修 「報告書編集基礎課程」	鈴木時夫	奈良文化財研究所
12月7日～8日	縄文時代文化研究会第2回研究集会 「縄文時代葬墓制研究の現段階」	廣田和穂	日本大学文理学部
12月12日～13日	埋蔵文化財保護機関における先進事業 調査	川崎 保 櫻井秀雄	滋賀県文化財保護協会ほか
12月13日～14日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	原田秀一 岡村秀雄	京都市
12月18日	長野県立歴史館 考古資料保存処理講習会	市川隆之	長野県立歴史館
2月4日～5日	長谷鶴前遺跡群出土品にかかる資料調査	柴田洋孝	愛知陶磁美術館ほか
2月5日～7日	全国埋蔵文化財担当者講習会	上田 真 藤原直人	愛媛県松山市
2月8日	東国古代遺跡研究会	川崎 保	国土館大学
2月18日～21日	文化財マネジメント職員養成研修	柳澤 亮	京都市
2月27日	パワハラ防止対策等に関する改正法 説明会	関崎修二	長野市芸術館

Ⅶ 学校・関係機関等への協力

(1) 学校関係への協力

期 日	学 校 名	対 応 者	内 容
7月17日～18日	川中島中学校	川崎 保ほか	職場体験学習
7月17日～18日	篠ノ井東中学校	川崎 保ほか	職場体験学習
7月19日	広陵中学校	川崎 保ほか	職場体験学習
6月19日 7月23日	辰野南小学校	廣田和穂ほか	沢尻東原遺跡発掘体験
8月21日	箕輪中学校	廣田和穂ほか	職場体験学習
8月21日～22日	篠ノ井西中学校	川崎 保ほか	職場体験学習
9月5日	川島小学校	廣田和穂ほか	沢尻東原遺跡発掘体験
10月10日	木島平小学校	柳澤 亮ほか	南大原遺跡見学
10月24日	小諸高校	河西克造ほか	職場体験学習

(2) 講師等の派遣・技術指導

期 日	依 頼 者	派 遣 者	内 容
4月18日	松本市教育委員会	綿田弘実	松本市麻神遺跡調査指導
4月20日	長野県立歴史館	大竹憲昭	シンポジウム「土器の登場 旧石器時代終末から縄文時代草創期の文化」
4月24日 11月8日 1月29日	須坂市教育委員会	綿田弘実	須坂市文化財審議委員会
5月8日	長野市立信州新町小学校	川崎 保	出前授業「縄文から弥生時代の暮らし」
5月9日	松本市立田川小学校	柴田洋孝	出前授業「縄文から弥生時代の人々の暮らし」
5月16日	篠ノ井老人福祉センター	櫻井秀雄	考古学からわかる日本の歴史
6月20日	篠ノ井老人福祉センター	西 香子	古代人の生活にふれよう
6月21日	長野市立安茂里小学校	綿田弘実	出前授業「縄文から古墳時代の暮らし」
7月8日 9月20日 10月21日	小布施町教育委員会	鶴田典昭	小布施町文化財保護審議会
7月8日	NHK長野放送局	廣田和穂	銅戈・銅鐸が出土した柳沢遺跡について
7月18日	篠ノ井老人福祉センター	綿田弘実	信越国境の縄文遺跡
8月26日	佐久市教育委員会	河西克造	龍岡城跡整備委員会
8月29日	篠ノ井老人福祉センター	贅田 明	種や実が出土した縄文遺跡
9月8日	野尻湖ナウマンゾウ博物館	大竹憲昭	野尻湖遺跡群と黒耀石
9月19日	篠ノ井老人福祉センター	市川隆之	コメ作りを始めた頃の弥生遺跡
9月19日	上田市丸子公民館	大竹憲昭	信州上田丸子夏期大学 「今、信州の遺跡がおもしろい」
9月24日	高森町教育委員会	綿田弘実	千早原・角田原遺跡の調査指導
9月27日	篠ノ井東中学校	市川隆之	出前講座 縄文編物や勾玉づくり
10月3日	長野市若穂公民館	河西克造	地域の学び講座「蘇る川田条里遺跡」

期 日	依 頼 者	派 遣 者	内 容
10月17日	篠ノ井老人福祉センター	寺内貴美子	雅な宝物が出土した古代遺跡
11月7日	篠ノ井老人福祉センター	贄田 明	国宝に指定された土偶たち
11月7日	長野県教育委員会	河西克造	文化財保護研修会「考古学からみた中南信の山城」
11月8日 11月29日	長野日本大学高校	川崎 保	古代史講座「古代遺跡から何がわかるか」
12月19日	篠ノ井老人福祉センター	川崎 保	千曲川大水害と古代遺跡
12月25日	長野県環境保全研究所	櫻井秀雄	座談会「縄文時代の自然との関わりを学ぶ」
2月16日	若穂郷土史研究会	大竹憲昭	公開講座「掘ってわかった信州の歴史」
2月19日	小諸市教育委員会	櫻井秀雄	小諸市文化財保護審議会
2月19日	佐久市教育委員会	河西克造	国史跡龍岡城跡保存整備委員会
2月20日	信濃町教育委員会	大竹憲昭	野尻湖ナウマンゾウ博物館協議会
3月7日	愛知県埋蔵文化財センター	綿田弘実	令和元年度設楽ダム関連発掘調査成果報告会

(3) 関係機関等への協力

期 日	依 頼 者	対 応 者	内 容
6月27日	長野県総合教育センター	川崎 保	長野県教職員研修事業 「遺跡発掘からの発信」講座
6月26日	辰野町教育委員会	廣田和穂	町文化財保護審議委員による沢尻東原遺跡見学
8月5日	辰野町教育委員会	廣田和穂	新人教職員研修
8月8日	国土交通省長野国道事務所	河西克造	石川条里遺跡の親子見学会
8月28日	東御市教育委員会	市川隆之	城の前遺跡調査指導
10月7日	篠ノ井地区住民自治協議会 篠ノ井歴史の会	河西克造	石川条里遺跡の見学
11月1日	下諏訪町	岡村秀雄 藤原直人	下諏訪町町長による一の釜遺跡の見学
11月5日 1月20日	長野国道事務所	岡村秀雄 藤原直人	下諏訪町町議会議員による一の釜遺跡の見学
11月30日～12月9日	中野市豊田支所	柳澤 亮ほか	南大原遺跡現場事務所施設の貸与

(4) 調査資料の利用

承諾月日	申 請 者	対 応 者	内 容
3月28日	鳥取県埋蔵文化財センター 所長	櫻井秀雄	柳沢遺跡報告書の転載（年報35未掲載分）
4月3日	個人	平林 彰	柳沢遺跡報告書の転載（年報35未掲載分）
4月3日	LIVE THE SEASONS	平林 彰	信州の遺跡縄文カレンダーの転載 （年報35未掲載分）

承諾月日	申請者	対応者	内容
4月12日	長野県立歴史館長	櫻井秀雄	長谷鶴前遺跡群の写真借用
6月3日	宮崎大学	櫻井秀雄	石川糸里遺跡の土壌譲与
6月4日	個人	贅田 明	小山寺窪遺跡の種実圧痕土器閲覧
7月3日	個人	平林 彰	「掘るしん in 中野」資料の転載
7月12日	個人	鶴田典昭	南大原遺跡の出土資料転載
7月18日	個人	寺内貴美子	縄文服の貸与
7月30日	個人	市川隆之	塩崎遺跡群の弥生中期土器閲覧
9月5日	NPO 法人むぎばんだ応援団 理事長	平林 彰	埋文キャラクター「ドキジロー」の転載
10月9日	中野市立博物館	平林 彰	柳沢遺跡報告書の転載
10月4日	個人	寺内貴美子	縄文服の貸与
11月12日	個人	鶴田典昭	南大原遺跡出土資料の閲覧
11月27日	個人	贅田 明	満り久保遺跡出土資料の閲覧
12月3日	個人	平林 彰	柳沢遺跡報告書の転載
12月10日	帝京大学文化財研究所	綿田弘実	矢出川遺跡群出土資料の閲覧
12月26日	松本市教育委員会	若林 卓	地家遺跡出土木製の樹種同定結果提供
12月27日	(一社) 稲荷山町暮らしと心を 育む会	平林 彰	東條遺跡出土資料の転載
1月7日	株式会社雄山閣	平林 彰	柳沢遺跡報告書の転載
1月13日	弘前大学人文社会科学部	廣田和穂	沢尻東原遺跡出土石器の閲覧

(3) 事業

事業名または個所名		委託事業者	事業個所	事業内容	精算 (千円)
発掘・整理作業 受託事業	中部横断自動車道建設	国土交通省 関東地方整備局 長野国道事務所	佐久市 地家遺跡ほか	整理作業 報告書刊行	51,978
	一般国道 18 号 (坂城更埴バイパス) 改築		長野市 石川条里遺跡ほか	発掘作業 整理作業	202,597
	一般国道 18 号 (長野東バイパス) 改築		長野市 小島・柳原遺跡群	整理作業 報告書刊行	43,689
	一般国道 20 号 (下諏訪バイパス) 改築		下諏訪町 一の釜遺跡	発掘作業	32,994
	防災・安全交付金 (道路) 事業 (一) 中野飯山線	長野県 北信建設事務所	中野市 柳沢遺跡	報告書刊行	2,499
	防災・安全交付金 (道路) (緊急 対策事業) 事業 (一) 三水中野線		中野市 南大原遺跡	発掘作業	103,933
	社会資本整備 総合交付金 (街路) 事業 (都) 高田若槻線	長野県 長野建設事務所	長野市 浅川扇状地遺跡群	発掘作業	87,131
	北沢東工場適地開発	辰野町	辰野町 沢尻東原遺跡	発掘作業	133,023
	中央新幹線建設工事 (一) 飯田南木曾線	東海旅客鉄道株式会社	飯田市 羽場権現堂遺跡	発掘作業	20,442
	研 修 等	長野県教育委員会	奈良文化財研究所		
自主事業	普 及 啓 発	8月 夏休み考古学チャレンジ教室			2,250
		随時 遺跡の現地説明会			
		随時 出前授業、発掘体験			
		広報誌「信州の遺跡」14号「ジュニアこうこがく」8号			
		ホームページ公開			
				合計	680,536

IX 調査研究ノート

- (1) 北信地域における弥生時代中期後半から後期初頭の石器組成
－栗林式期から吉田式期を対象として－

調査研究員 村井 大海

- (2) 浅川扇状地遺跡群桐原地区出土の猪目墨書土器について

調査研究員 伊藤 愛

- (3) 長谷のかめやき －長谷焼調査の覚書－

調査研究員 柴田 洋孝

(1) 北信地域における弥生時代中期後半から後期初頭の石器組成

- 栗林式期から吉田式期を対象として -

村井 大海

1 はじめに

中野市南大原遺跡は本年度を含め5次にわたる発掘調査が実施され、長野県埋蔵文化財センター（以下当センターという）では2011～2013年度にかけて、一般県道三水中野線建設事業に伴う発掘調査において、弥生時代中期（栗林式期）・後期（吉田式期）の遺構を多数調査した。竪穴建物跡からは鉄鍬および鉄斧と推定できる鉄器が出土し、さらに鉄器加工関連遺構の可能性のあるものも確認され、またそれらの遺構に伴い多数の石器が出土した。これらの遺構・遺物に関しては2016年に報告書が刊行されている（鶴田・町田2016）。

そして本年度、当センターでは2011～2013年度の発掘調査範囲の隣接地において発掘調査を行い、弥生時代中期・後期の遺構を確認し、中期の竪穴建物跡から鉄器加工に関係する可能性のある炉跡および、鉄製品と小鉄片を検出した。そしてこれらの遺構に伴い石器も多数出土した。これらの遺構・遺物については現在基礎整理を進めている段階である。

北信地域において弥生時代中期から後期は水田稲作が定着・安定し、さらに鉄器が導入された時期と位置付けることができる一方で、道具組成に石器が一定の役割を果たすことも事実である。水田稲作の普及や道具の石から鉄への材質転換は、食料や道具等の生産および流通システムの一変革を伴う事象と考えられる。このような状況において南大原遺跡から出土した石器の位置づけは当地域の弥生社会を考えるうえで非常に重要であると考える。

そこで本稿では弥生時代中期後半の栗林式期から後期初頭の吉田式期に焦点を絞り、当該時期の石器組成を確認し、南大原遺跡出土石器の整理・報告の一助としたい。また当該時期の石器群の特徴および北信地域の生産・流通システムにおける変化過程について石器組成の比率から予測できる

私見を述べてみたい。

なお、本稿で扱う石器は集落遺跡において時期の判明する遺構から出土したものに限定し、遺構の時期を石器の帰属する時期とする。その際、遺跡、遺構からの石器の出土量は問わず、1点のみの出土であっても組成に含む。遺構の時期は出土した土器を基準とし、寺島孝典氏の編年を参考にしつつ、石川日出志氏の編年に従う（寺島1999、石川2002）。

2 石器の分類

本稿では主に生産具や加工具など利器として使用された石器に注目したい。そのため磨製石剣や磨製石戈等の所謂武器形石製品や勾玉、管玉等の石製装身具は組成に含めない。武器形石製品や石製装身具についても、弥生社会の生産・流通システムを考察する際に非常に重要な遺物であり、これまで多くの研究例があるが、これらの石製品と利器として使用された石器では生産・流通システムが大きく異なることが考えられるためである。また、剥片（二次加工や微細剥離痕がある剥片も含む）や碎片も本稿では組成に含めない。

本稿での石器分類は以下の通りである。

○磨製石斧（以下に大別する。）

・太形蛤刃石斧

・扁平片刃石斧

・小形磨製石斧

ノミ形石斧や小礫を研磨し磨製石斧としたものを小形磨製石斧として一括した。

○打製石鍬（以下に細別する。）

A-1：茎部をもつ短身（長さが幅の3倍未満）のもの

A-2：茎部をもつ短身で鋸歯縁のもの

B-1：茎部をもつ長身（長さが幅の3倍以上）のもの

B-2：茎部をもつ長身で鋸歯縁のもの

C：無茎のもの

D：アメリカ式石鏃

E：未製品

F：細別不明

○磨製石鏃（以下に細別する。）

I：長さが幅の3倍未満の短身のもの

II：長さが幅の3倍以上の長身のもの

E：未製品

F：細別不明

○打製石斧（以下に細別する。）

A：長さ15cm以上のもの

I：長さ15cm以下のもの

F：細別不明

○大型直縁刃石器

長野県においては従来、刃器と報告されることが多い石器であるが（町田1996）、斎野裕彦氏はこれらの石器のうち長さ10cm以上、刃長9cm以上の直線状の刃部を持つ石器を大型直縁刃石器と命名し、全国的に展開することを明らかにした（斎野1993・1994）。本稿でも斎野氏の定義に従い、この名称を用いる。

○小型直縁刃石器

従来、刃器や横刃形石器等と報告されていたもののうち、直線状の刃部をもち、長さおよび刃長が大型直縁刃石器未満のものを本稿では便宜上小型直縁刃石器とし、大型直縁刃石器と区分する¹⁾。

○有肩扇状形石器²⁾

南信地域で見られる有肩扇状形石器と形態的に類似するもの。

上記の他、磨製石包丁、磨石、凹石、敲石、みがき石、石鎚、台石、石皿、砥石、石錐、楔形石器、石核に分類する。

3 時期別の様相

(1) 栗林1式期

上野遺跡、琵琶島遺跡、檀田遺跡、春山・春山B遺跡、松原遺跡、篠ノ井遺跡群において、当該時期に帰属すると考えられる遺構を確認し、これらの遺構に伴う132点の石器を集計した。太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧がほぼ同じ割合で見られる。打製石鏃が多くみられ、そのほとんどがA-1

である。その一方磨製石鏃が少なく、すべてEである。打製石斧や大型直縁刃石器、小形直縁刃石器、磨製石包丁が、石器組成に一定程度認められ、敲石や砥石なども認められる。

(2) 栗林1～2式古段階

南大原遺跡³⁾、吉田古屋敷遺跡、春山・春山B遺跡、松原遺跡において当該時期と考えられる遺構を確認し、これらの遺構に伴い29点の石器を集計した。他の時期と比較し集計できた石器が少なく、全体像を反映しているとは言い難いが、栗林1式期同様に打製石鏃の多さが目立ち、磨製石鏃が少ない点は指摘できよう。

(3) 栗林2式古段階

柳沢遺跡、松原遺跡、篠ノ井遺跡群より当該時期と考えられる遺構を確認し、348点の石器を集計した。ほとんどが松原遺跡の資料であり、当該時期の松原遺跡の様相が色濃く反映された石器組成となっている。太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧が認められ、扁平片刃石斧の出土比率が多い。石鏃は依然として打製石鏃が多数を占めるが、磨製石鏃の割合が増加する。形態は打製石鏃がA-1中心、磨製石鏃がI中心である。打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁の他、南信地域で特徴的にみられる有肩扇状形石器と形態的に類似したものが松原遺跡で見られる。敲石や砥石等も一定の割合で組成している。

(4) 栗林2式古段階～新段階

照丘遺跡、柳沢遺跡、南大原遺跡、檀田遺跡、吉田古屋敷遺跡、松原遺跡より当該時期と考えられる遺構を確認し、それらに伴い164点の石器を集計した。多くは松原遺跡出土石器である。2式古段階同様、太形蛤刃石斧に比べ扁平片刃石斧の出土比率が多い。石鏃は打製石鏃が多数を占める中で、磨製石鏃も一定程度認められる。形態は打製石鏃がA-1中心、磨製石鏃がI中心である。打製石斧や大型直縁刃石器、小形直縁刃石器、磨製石包丁の他、有肩扇状形石器が照丘遺跡で認められる。敲石や砥石等も一定程度認められる。

(5) 栗林2式新段階

北原遺跡、南大原遺跡、栗林遺跡、徳間本堂原

遺跡、県町遺跡、春山・春山B遺跡、榎田遺跡、松原遺跡より当該時期と考えられる遺構を確認し、2573点の石器を集計した。当該時期の榎田遺跡や松原遺跡、春山・春山B遺跡は太形蛤刃石斧の大規模製作址および生産的分業による遺跡間ネットワークが明らかにされた遺跡である（町田2008、馬場2009）。この時期に太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧の比率が拮抗するようになる。石鏃は打製石鏃と磨製石鏃の比率が拮抗するようになり、打製石鏃においてA-1の他、A-2やB-2、Cが僅かながら認められるようになる。磨製石鏃はI中心である。打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁が一定の割合で組成し、敲石や砥石等も認められる。

(6) 栗林2式新段階～3式期

南大原遺跡、栗林遺跡、中俣遺跡、松原遺跡、塩崎遺跡群より当該時期と考えられる遺構を確認し、594点の石器を集計した。太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧の出土比率が拮抗している。石鏃の様相は栗林2式新段階と同様の傾向である。打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁が一定の割合で組成し、敲石や砥石等も認められる。

(7) 栗林3式期

徳間本堂原遺跡、県町遺跡、春山・春山B遺跡、松原遺跡より当該時期と考えられる遺構を確認し、540点の石器を集計した。太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧の組成比率が拮抗している。石鏃は打製石鏃の比率が磨製石鏃に比べ増える。形態は打製石鏃がA-1中心、磨製石鏃がI中心である。その他、打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁が一定の割合で組成し、敲石や砥石等も認められる。

(8) 吉田式期

千田遺跡、南大原遺跡、長野吉田高校グラウンド遺跡、本村南沖遺跡から当該時期と考えられる遺構を確認し、85点の石器を集計した。吉田式期は栗林式期に比べ石器の出土量が減少する傾向がある。太形蛤刃石斧と扁平片刃石斧がほぼ同じ割合で認められるが、両者とも石器群全体の比率

でみると減少傾向である。石鏃は磨製石鏃の比率が大きくなり、打製石鏃を凌ぐ。打製石鏃にDがみられるようになる。打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁は大きく減少する一方、敲石や砥石は一定程度組成し、特に凹石が目立つようになる。

4 石器組成における変遷と画期

第2図は栗林1式期から吉田式期における石器組成の比率を示したものである。nは各期の石器総数を表し、遺跡数は各期において石器を抽出した遺跡の数を示している。

太形蛤刃石斧や扁平片刃石斧は栗林1式期では両者がほぼ同じ割合で組成するが、2式古段階では扁平片刃石斧の比率が高くなる。栗林2式新段階は、北信地域が太形蛤刃石斧生産の拠点的地域であったと位置付けられており、太形蛤刃石斧における大規模製作址である榎田遺跡と松原遺跡から大量の太形蛤刃石斧の製品および未製品が出土している（町田2008、馬場2009）。その影響を受けたためか、この時期では太形蛤刃石斧の組成比が増大し、扁平片刃石斧の比率と拮抗するようになる。吉田式期では磨製石斧全体の出土量が減り、石器群全体の組成比においても減少する。

石鏃は栗林1式期では打製石鏃が目立ち、磨製石鏃が非常に少ない状況が、栗林2式新段階には打製石鏃と磨製石鏃の比率が拮抗するようになり、吉田式期には磨製石鏃の比率が打製石鏃を逆転する。形態は各時期を通して、打製石鏃はA-1が中心であるが栗林2式新段階にはA-2、B-2のものがみられるようになり、吉田式期にはDが確認できるようになる。磨製石鏃は各時期を通じてIが中心であり、Eも常に一定の割合で確認できる。

打製石斧や大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、磨製石包丁は栗林式期を通して一定の割合で組成に含まれていたが、吉田式期になると激減する。有肩扇状形石器は北信地域ではほとんど確認することができなかった。

敲石や砥石等は栗林1式期から吉田式期にかけて大きな変化は読み取れないが、常に一定程度組

成に含まれており、吉田式期では凹石が増えるようである。

以上のように石器組成の変遷を概観してきたが、北信地域の栗林式期から吉田式期にかけての石器組成の大きな画期として栗林2式新段階と吉田式期を指摘できよう。

栗林2式新段階には、太形蛤刃石斧の生産拠点が展開した影響か、栗林2式古段階において扁平片刃石斧に比べ少なかった太形蛤刃石斧の比率が増し、両者が拮抗するようになる。石鏃においても、それまで打製石鏃優勢であった状況が磨製石鏃と拮抗するようになる。

吉田式期では石器全体の出土量が減少する。また磨製石鏃が打製石鏃を凌ぐようになり、打製石鏃においてはDがみられるようになる狩猟具、武器の大きな変化がある。さらに栗林1式期から組成の中にある程度の割合で存在してきた打製石斧や大型直縁刃石器、小形直縁刃石器、磨製石包丁が吉田式期に激減することが指摘できる。

次に、このような石器組成の変遷が意味することを、特にその比率に注目し、生産・流通システムの変化、道具の鉄器化に関連した私見を述べたい。その際に、石器を機能的に大別して比較することが有効であると思われる。弥生時代の石器は、これまでの学史の中で伐採斧＝太形蛤刃石斧、加工斧＝扁平片刃石斧など機能の位置づけがなされている石器が多数ある。また近年は原田幹氏の分析をはじめとした使用痕研究が精力的に進められており、大型直縁刃石器や小型直縁刃石器、有肩扇状形石器の多くが農耕に用いられた石器であることが指摘されている（斎野 1993・1994、原田 2003・2009）。本稿ではこれらの例に鑑み石核以外の石器を以下のように機能別に大別した。

- ・伐採斧：太形蛤刃石斧
- ・加工斧：扁平片刃石斧、小形磨製石斧
- ・狩猟具、武器：打製石鏃、磨製石鏃
- ・農具：打製石斧、大型直縁刃石器、小型直縁刃石器、有肩扇状形石器、磨製石包丁
- ・加工具1：磨石、凹石、敲石、みがき石、石鎚、台石、石皿、砥石

・加工具2：石錐、楔形石器

第3図は機能別に大別した石器組成の比率を表したものである。

伐採斧と加工斧は磨製石斧の生産・流通システムはもとより、木製品の生産・流通システムの影響も受ける。栗林1式期で両者の組成比はほぼ同じであったのが栗林2式古段階には加工斧が優勢になる。石川県八日市地方遺跡ではこれより以前の弥生時代中期中葉において伐採は、鉄斧を所有する集団を中心とした複数の集団が共同で行い、製品に仕上げる加工は各集団または個人で鉄および石の斧を用いて行われた様子が指摘された（樋口 2019、鶴来・下濱 2019）。北信地域においてもこのような木製品の生産・流通システムに伴い伐採斧と加工斧の組成に変化が生じた可能性が指摘できるのではないか。栗林2式新段階以降伐採斧と加工斧の比率は拮抗するが、これは当該地域が伐採斧の一大生産拠点だったことが影響しているよう。吉田式期での磨製石斧全体の減少は木製品製作における道具の鉄器化を示している可能性があるだろう。

吉田式期では農具に関わる石器が激減する。これは農具における材質転換や農耕に伴う生産・流通システムの変革を表す事象として理解することができよう。特に水田稲作の普及という生産システムの変化が農具の石から木材あるいは鉄への材質転換を促した可能性を指摘したい。

道具の鉄器化については、鉄斧が南大原遺跡の栗林2式新段階～3式期の住居と春山・春山B遺跡の栗林3式期の住居から、鉄鏃が南大原遺跡の栗林2式新段階と吉田式期の住居から出土しており、斧と鏃の鉄器化が認められる。斧については先に指摘したとおりである。また、石鏃は吉田式期において数は減るものの組成比は栗林式期よりも高い。このことは、鏃の鉄器化が進む一方、石鏃も一定の役割を担い、両者の共存や補完的關係、材質による使い分けを考えることができよう。加工具1は弥生時代を通してさまざまな対象物の加工に用いられた道具と考えられ、その一部は鉄器加工にも用いられたであろう。しかし、栗林式

期から吉田式期において組成比の大きな増減は認められない。これは鉄器加工という新技術の導入に際して、旧来から使用してきた道具を応用して用いることにより、新技術導入のコストおよびリスクを低減していた様相を示しているかもしれない。鉄器加工技術導入の在り方を示す事象として注目される。

5 おわりに

北信地域における栗林式期から吉田式期にかけてという、地域・時期を限定した分析であったが、それでも石器組成の変化を読み取ることができた。最後に本年度出土した南大原遺跡の石器の整理・報告に向け、本稿を草するにあたり感じた課題を述べたい。石器組成から解釈に至る過程で論理的飛躍があることは黒沢浩氏により指摘されている。これまでの弥生石器の組成を扱った論考は石器を機能別に分類し、生業の変化や鉄器化を読み取ろうとするものが多かった。その結果石器機能の組成についての解釈と石器系統の組成についての解釈が混同していると指摘される(黒沢1995)。本稿では機能についての解釈と系統についての解釈の混同をさけるため、石器を形態別に分類した後、機能別に大別するという方法を取り、石器の系統的变化と機能的変化を分離して考えようとした。しかし本稿では石器の最も基礎的分析である技術型式学的分析は行えていない。石器の地域差、時期差を抽出し、その系統を理解するためには技術型式学に立脚した分析を欠くことができないはずであるが、弥生時代石器研究では大陸系磨製石器の一部を除きあまり議論されていないように感じる。その他黒沢氏が指摘している標本サイズの問題等、本稿は氏の指摘した課題の多くがそのまま残されてしまっている。今後、弥生石器を報告する際に解決していくべき課題である。

註

1) 原田幹氏は使用痕分析から、小形の石器を「穂摘み具」とした。さらに大型直縁刃石器を稲株等の残屑処理や除草作業の道具とし、「穂摘み具」+大型直縁刃石器のセット関係を明らかにした(原田2003・2009)。両者を区分し、セット関係を明らかにすることは農耕の受容や定着を考える際に重要になると思われる。本稿はこの石器を形態と法量で分類しているため「穂摘み具」ではなく、小型直縁刃石器と便宜上呼ぶ。

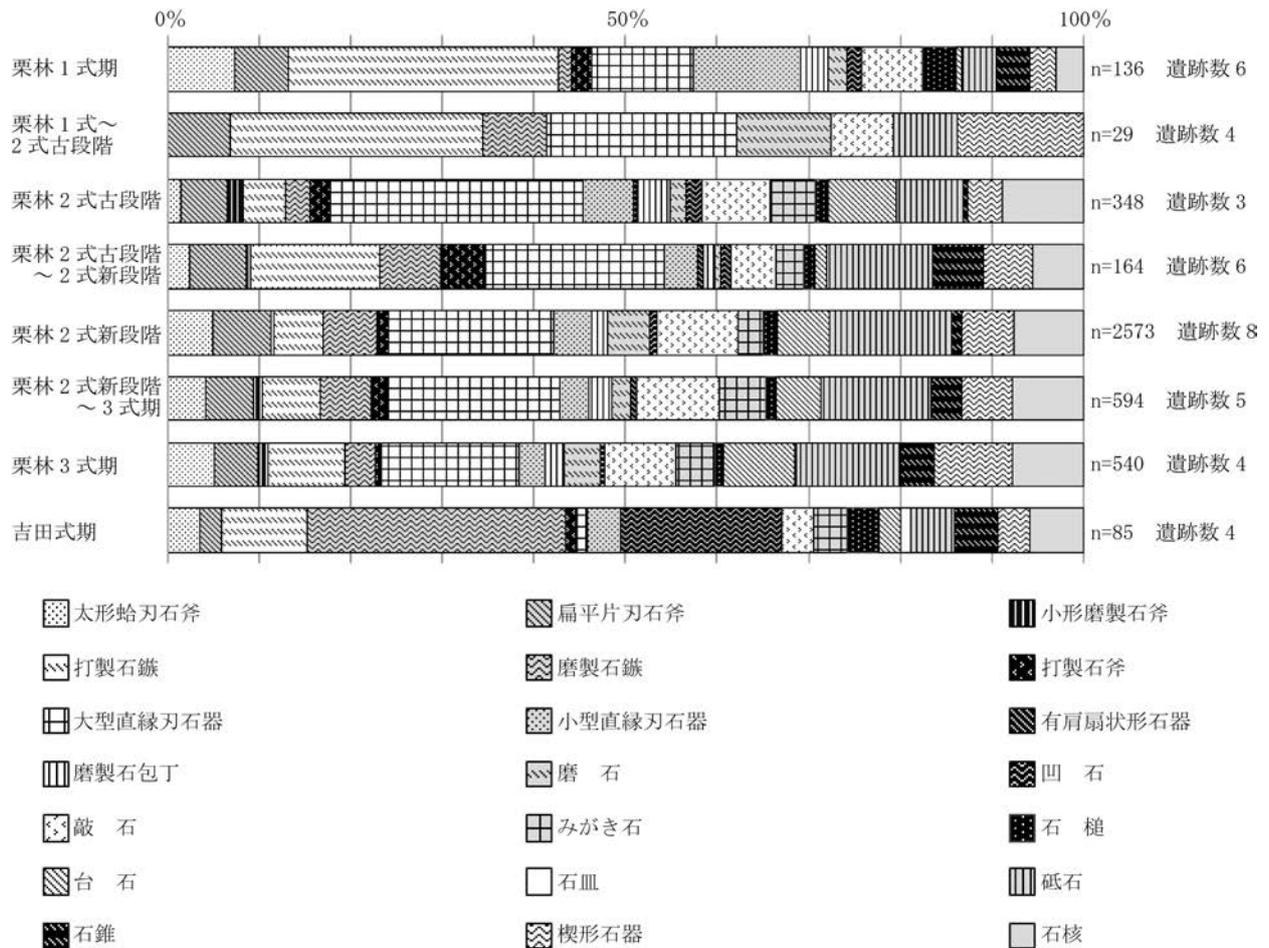
- 2) 有肩扇形状石器を斎野氏は大型直縁刃石器に含んでいる。使用用途が同一であるという使用痕分析の結果を反映した分類であるが、本稿では形態的差異を評価し、大型直縁刃石器とは区分する。
- 3) 南大原遺跡出土石器は2011~2013年度の調査で出土した既報告資料のみを扱い、今年度調査で出土した石器は組成に含めていない。

参考文献

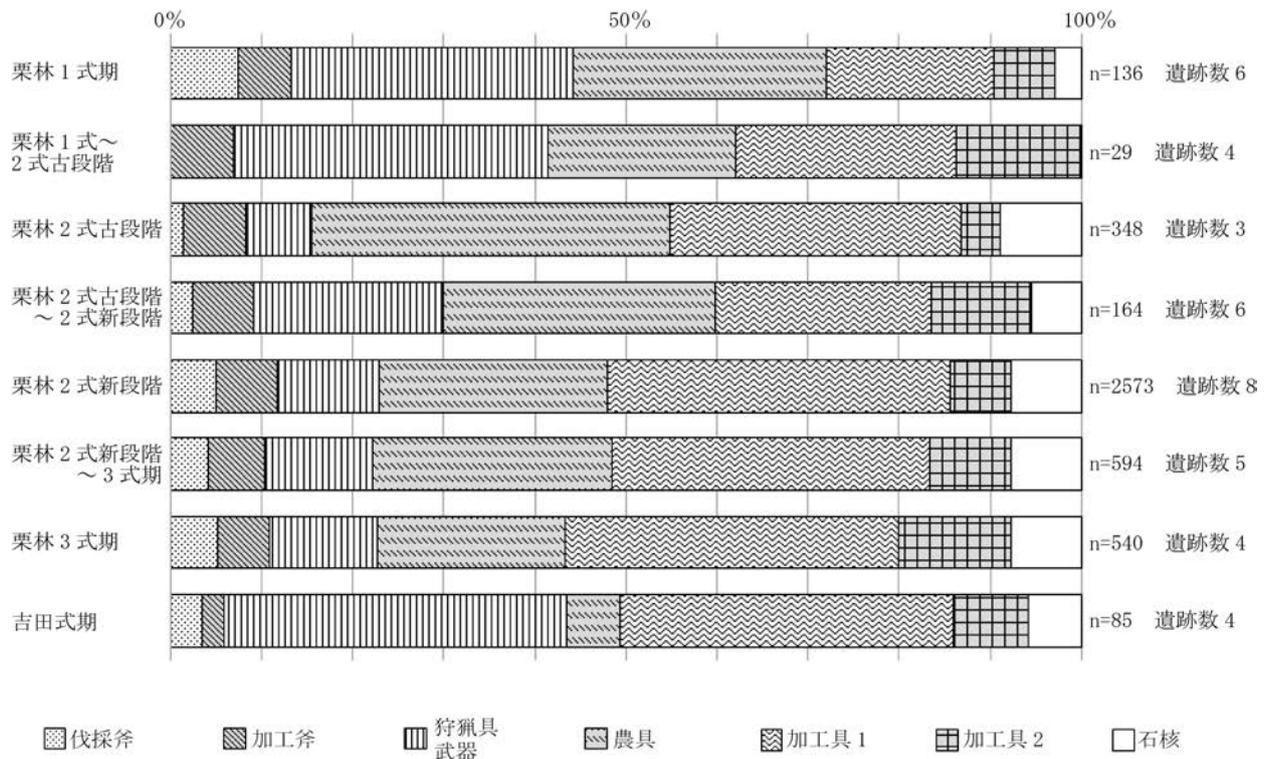
- 石川日出志 1994「東日本の大陸系磨製石器」『考古学研究』41-2
 石川日出志 1996「弥生時代石器」『考古学雑誌』82-2
 石川日出志 2002「栗林式土器の形式過程」『長野県考古学会誌』99・100
 黒沢浩 1995「弥生時代石器研究に寄せて」『みずほ』15
 斎野裕彦 1993・1994「弥生時代の大型直縁刃石器 上・下」『弥生文化博物館研究報告』2・3
 杉山浩平 2010『東日本弥生社会の石器研究』
 鶴来航介・下濱貴子 2019「八日市地方遺跡の生産活動と確認調査を通じた理解」『考古学研究』65-4
 鶴田典昭・町田勝則 2016『南大原遺跡』
 寺島孝典 1999「長野盆地南部の様相」『長野県の弥生土器編年』
 馬場伸一郎 2009「磨製石斧の「流通」と「交易」-栗林式土器文化の再考材料として-」『中部の弥生時代研究』
 原田幹 2003「石製農具の使用痕研究-収穫に関わる石器についての現状と課題-」『古代』113
 原田幹 2009「弥生石器の使用痕研究」『中部の弥生時代研究』
 樋上昇 2019「北陸型」木製品の展開と地域交流-工具の問題も含めて-」『北陸の弥生世界わごところ』
 町田勝則 1992「信濃における弥生時代石器文化の終焉」『弥生時代の石器-その始まりと終わり-』
 町田勝則 1996「石器の研究法-報告文作成に伴う観察・記録法①」『長野県の考古学』
 町田勝則 1997「長野県北部(千曲川流域)の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成』4
 町田勝則 2008「石器に弥生の社会を読む」『赤い土器のクニの考古学』



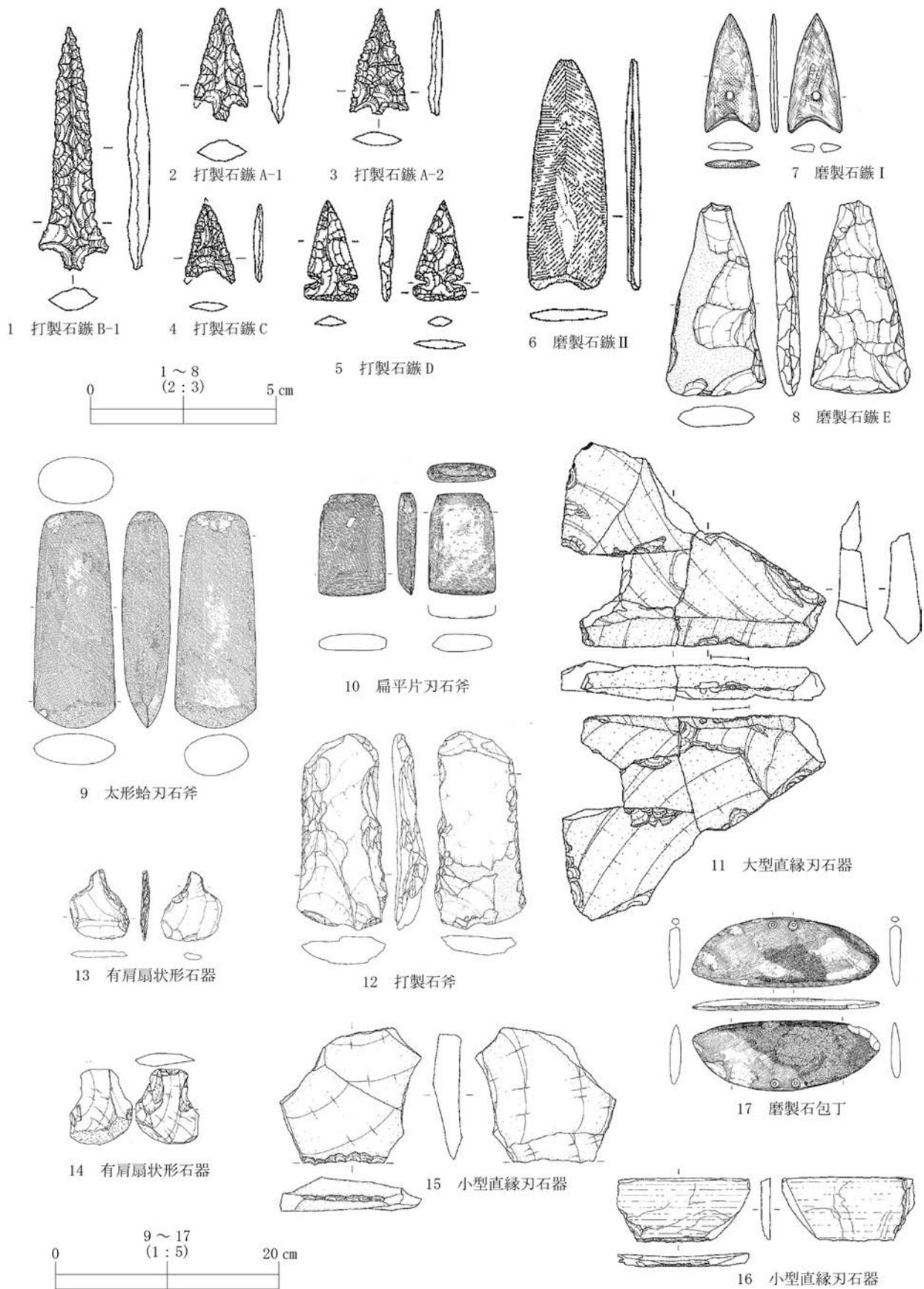
第1図 遺跡分布図



第 2 図 時期別石器組成表



第 3 図 時期別石器機能大別組成表



第4図 北信地域における栗林式期から吉田式期の石器
 (南大原遺跡：1～4、11、15、16 長野吉田高校グラウンド遺跡：5、6
 横田遺跡：7、8、12 春山・春山B遺跡：9 松原遺跡：10、13、17 照丘遺跡：14)

(2) 浅川扇状地遺跡群桐原地区出土の猪目墨書土器について

伊藤 愛

1 はじめに

長野県埋蔵文化財センターでは、高田若槻線の事業に伴い、2011年度より浅川扇状地遺跡群の発掘調査を実施してきた。調査は吉田田町遺跡・桐原宮北遺跡・桐原牧野遺跡の3遺跡に及び、調査規模は南北850m、幅30mである。

これまで弥生時代～中近世の多彩な遺構や遺物が発見されているが、本年度の調査では、古代の集落域にあたる桐原地区より猪目の墨書を施した土器（以下「猪目墨書土器」という）が出土した。

墨書土器は全国的に多数出土しており、その文字は地名や個人名、集団名を表すこともあれば、吉祥句や呪符を表すものもある。なかでも吉祥句や呪符は記号であることが多く、「#」や五芒星が一般的である。しかし、猪目の墨書を施した土器は、例が少なく、その意義については明らかになっていない。本項では、これまでの調査において本遺跡群内で出土した墨書土器の内容や出土位置を示し、その中で猪目墨書土器の意義を探ることとする。なお、紹介する墨書土器は2017年度までの本格整理作業と本年度の基礎整理段階で抽出されたものに限る。

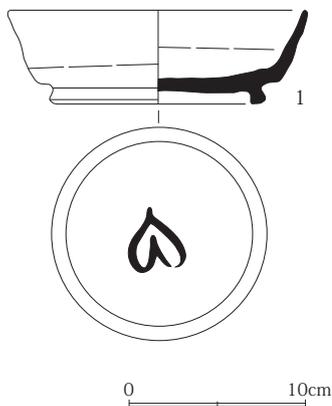
2 事例報告

猪目墨書土器が出土したのは、桐原牧野遺跡の土坑（SK324）である。遺構の分類は土坑としたが、かく乱に切られているうえに半分は調査区外となるため、正確な規模や形状はわからず、竪穴

建物跡である可能性もある。土器は覆土中より口縁を上に向けた状態で出土した。口径12.4cm、高台径8.7cm、器高4.0cmを測り、8世紀後半～9世紀前半の所産と考えられる（第1図・第2図）。墨書は底部外面の中央に記される。書き順としては尖った部分から書き始めて左へ下降し、そのまま一筆書きで下部の窪みを経て頂部に結する。猪目の向きを意識した書き方であることがわかる。

こうした猪目墨書土器は、本遺跡群では過去にも発見例がある。2010年に長野市教育委員会が行った宅地造成工事に伴う桐原宮北遺跡の調査で出土したもので、5点が確認されている（第3図）。出土遺構について、長野市教育委員会は不明遺構（SX01）とするが、地形に伴って底面が傾斜していることから、溝状遺構である可能性も指摘している。後述するが、本遺構からは大量の土器が出土しており、その種別としては須恵器が大半を占める。その中には猪目以外の墨書土器も多数含まれており、さらに円面硯が出土している点は特筆したい。この出土地点から北東へ約100m地点の当センター調査地点でも、これと同一個体であると考えられる筆立て付円面硯が出土しており、文字を使う人物の存在を裏付けている。

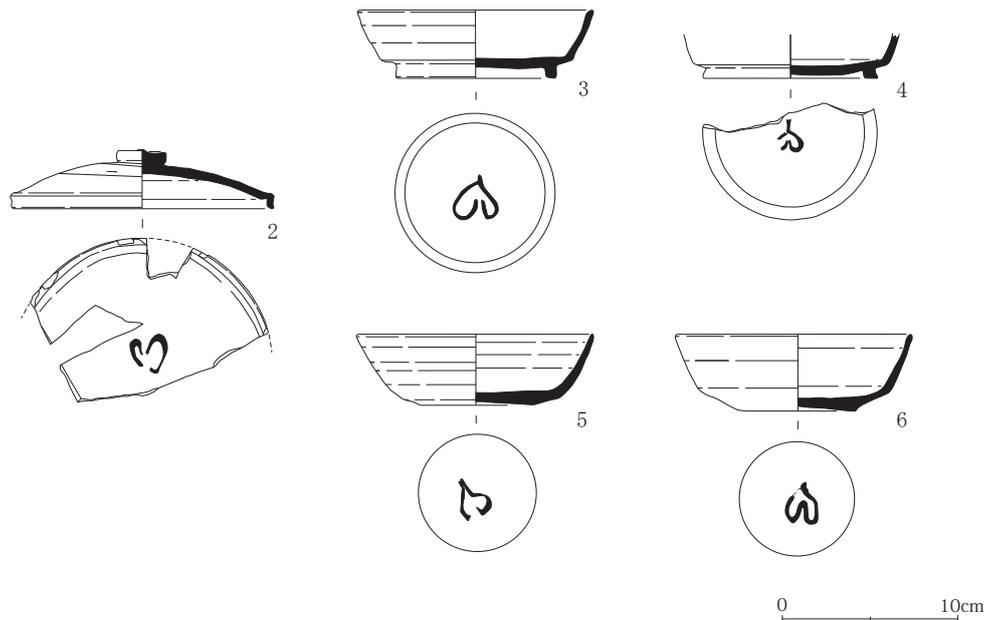
本年度出土の1点と、長野市教育委員会調査の5点を表1に記した。器種は2の坏蓋を除いてすべて須恵器坏である。墨書が施されているのは、坏は底部外面、蓋は内面で、いずれも普段食膳具



第1図 2019年度出土猪目墨書土器



第2図 猪目墨書土器写真



第3図 桐原宮北遺跡出土猪目墨書土器

	出土遺跡	出土遺構	器種	記載位置
1	桐原牧野	SK324	須恵器坏	底部外面
2	桐原宮北	SX01	須恵器蓋	蓋内面
3	桐原宮北	SX01	須恵器坏	底部外面
4	桐原宮北	SX01	須恵器坏	底部外面
5	桐原宮北	SX01	須恵器坏	底部外面
6	桐原宮北	SX01	須恵器坏	底部外面

第1表 桐原地区出土の猪目墨書土器

として使用する際には見えない箇所にかかれてい
る。2～5は1の墨書と比べてやや崩れた印象を
受け、うち2～4の墨書は猪目下部の窪みの部分
を分離させているが、6は繋げて書いており、1
に形状に近い。ただし、1は左方向に下降して書
き始めているのに対し、6は右から書き始める
という違いがみられる。

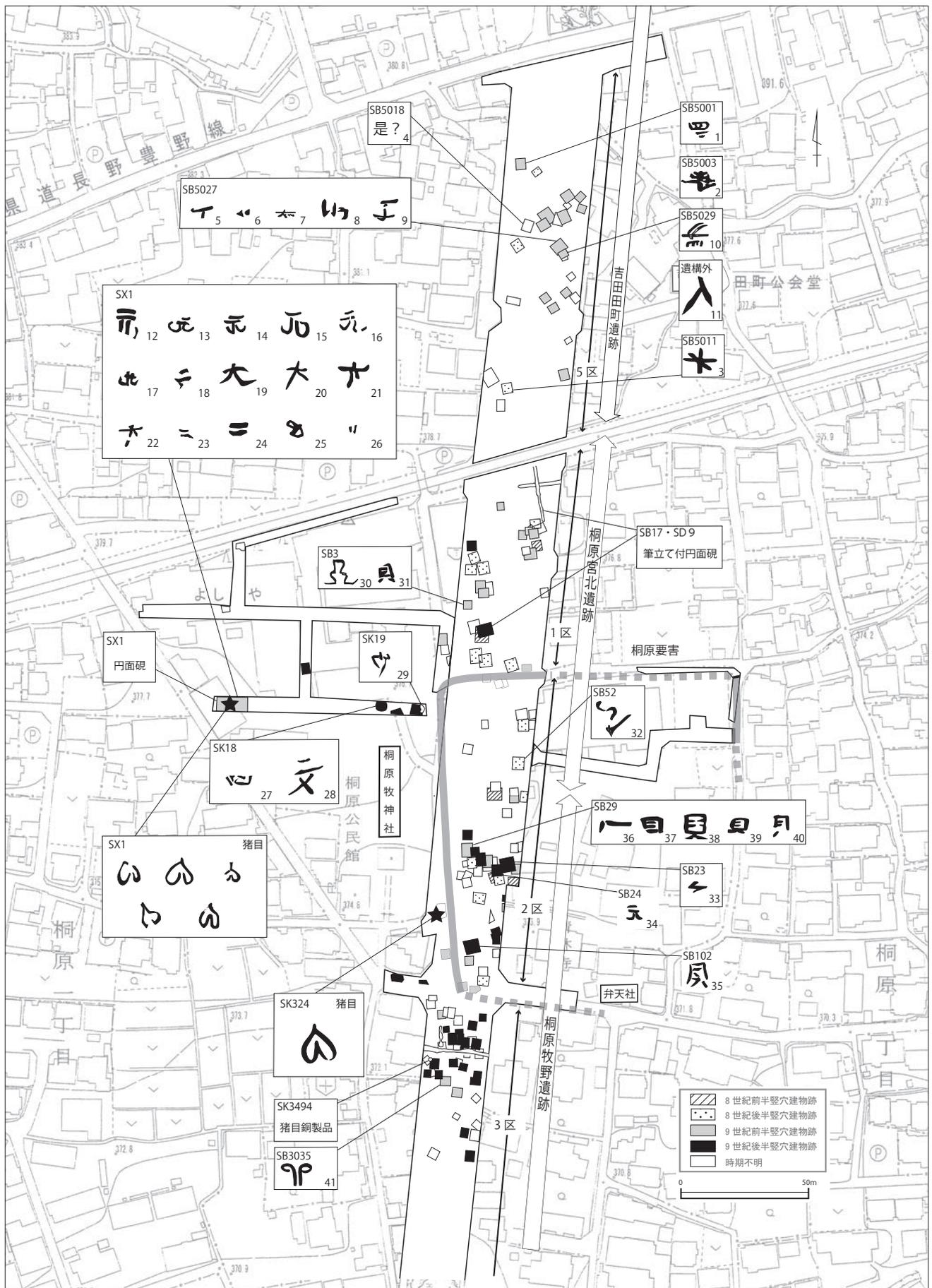
3 調査区周辺出土の墨書土器

ここで、吉田田町・桐原宮北・桐原牧野遺跡で
これまでに確認された墨書土器を概観する。猪目
墨書土器を除くと、確認できる墨書土器は41点
である。そのおもな内容や出土地点は、第4図・
第2表のとおりである。本遺跡群で墨書土器がみ
られる時期は、おおむね8世紀後半～9世紀代に
あたる。そのほとんどが堅穴建物跡（SB）から
の出土であるが、突出しているのは桐原宮北遺跡
のSX01より出土した土器群である。既に述べた

ように、SX01からは大量の土器が出土しており、
そのなかには猪目をはじめとする様々な墨書土器
が確認できる。主なものは「大」「元」で、なか
にはほとんど記号化しており、一概に文字と言
い難いものもある。この他、別の出土地点で目立
つのは「貝」の文字である。本年度の調査でも
SB102から出土しているが（第5図）、SB29では
「貝」の墨書土器が4点出土するなど、その密集
性には注目すべきであろう。

文字が書かれる部位としては底部外面や体部外
面が大多数を占め、体部外面に書かれた文字は、
逆位の可能性のあるもの1点を除き、ほぼすべて
正位である。SX01出土の猪目や「大」「元」はほ
とんどが坏底部外面に施されているが、「貝」は
体部外面にみられるのみである。この墨書の記載
位置について、平川南氏は官衙における代表例で
ある「厨」の墨書に着目し、食器として使用され
るものは底部外面に、祭祀用のものは坏の体部外
面や内面に墨書を施すとの見解を述べている（平
川 2000）。この見解が集落出土の墨書にも当ては
まるのか否かについては検討の余地があるが、記
載位置に何らかの法則があったと考えられる。

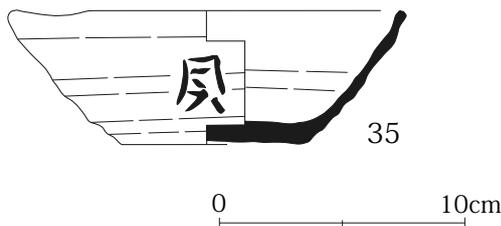
調査区周辺における墨書土器の出土地点につ
いては、ひとつの遺構からの出土量の違いはあるも
の、全体的に幅広く分布している。しかし、猪



第4図 浅川扇状地遺跡群調査地周辺の出土墨書土器分布図

	出土遺跡	出土遺構	器種	文字	記載位置	文字の向き	備考
1	吉田田町	SB5001	須恵器杯	四？皿？	体部外面	正位	下部に文字が続くか
2	吉田田町	SB5003	須恵器杯	不明	体部外面	正位	
3	吉田田町	SB5011	須恵器杯	不明	体部外面	正位	
4	吉田田町	SB5018	須恵器杯	是？	底部外面		
5	吉田田町	SB5027	須恵器杯	不明	体部外面	正位	口縁部のみが残存
6	吉田田町	SB5027	須恵器杯	不明	体部外面	正位	口縁部のみが残存
7	吉田田町	SB5027	須恵器杯	不明	体部外面		
8	吉田田町	SB5027	須恵器杯	不明	体部外面	正位	
9	吉田田町	SB5027	須恵器杯	不明	体部外面	正位	
10	吉田田町	SB5029	須恵器杯	不明	体部外面	逆位か	
11	吉田田町	遺構外	須恵器杯	入？	底部外面		
12	桐原宮北	SX01	須恵器杯	元	底部外面		
13	桐原宮北	SX01	須恵器杯	元	底部外面		
14	桐原宮北	SX01	須恵器杯	元	底部外面		
15	桐原宮北	SX01	須恵器杯	元	底部外面		
16	桐原宮北	SX01	須恵器杯	元	底部外面		
17	桐原宮北	SX01	須恵器杯	元	底部外面		
18	桐原宮北	SX01	須恵器杯	大	底部外面		
19	桐原宮北	SX01	須恵器杯	大	底部外面		
20	桐原宮北	SX01	須恵器杯	大	底部外面		
21	桐原宮北	SX01	須恵器杯	大	底部外面		
22	桐原宮北	SX01	須恵器杯	大	底部外面		
23	桐原宮北	SX01	須恵器杯	二	底部外面		
24	桐原宮北	SX01	須恵器杯	二？	底部外面		「元」の可能性あり
25	桐原宮北	SX01	須恵器杯	不明	底部外面		
26	桐原宮北	SX01	須恵器杯	不明	体部外面		
27	桐原宮北	SK18	須恵器杯	不明	体部外面		
28	桐原宮北	SK18	灰釉陶器皿	文	底部外面		
29	桐原宮北	SK19	須恵器杯	不明	体部外面		
30	桐原宮北	SB3	須恵器杯	不明	体部外面	正位	
31	桐原宮北	SB3	須恵器杯	貝	体部外面	正位	
32	桐原宮北	SB52	須恵器蓋	不明	蓋外面		
33	桐原宮北	SB23	土師器杯	不明	体部外面	正位	
34	桐原宮北	SB24	須恵器杯	元	底部外面		
35	桐原牧野	SB102	須恵器杯	貝	体部外面	正位	2019年度出土
36	桐原牧野	SB29	須恵器杯	不明	体部外面	正位	
37	桐原牧野	SB29	須恵器杯	貝？	体部外面	正位	
38	桐原牧野	SB29	須恵器杯	貝	体部外面	正位	
39	桐原牧野	SB29	須恵器杯	貝	体部外面	正位	
40	桐原牧野	SB29	須恵器杯	貝	体部外面	正位	
41	桐原牧野	SB3035	須恵器杯	不明	体部外面		

第2表 浅川扇状地遺跡群桐原地区出土の墨書土器一覧（猪目を除く）
（※長野市教育委員会調査のデータ（12～29）は報告書（長野市教育委員会2012）の転用）



第5図 「貝」墨書土器（2019年度出土）

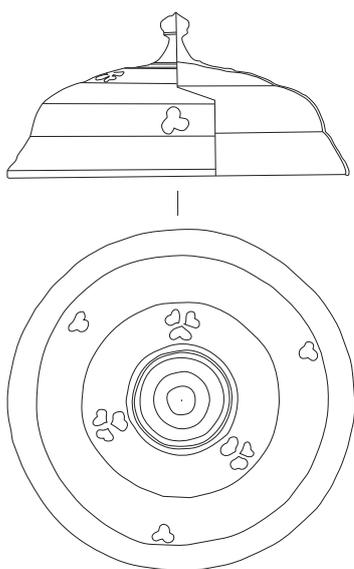
目墨書土器に限定した場合、その分布は調査区中央部の桐原牧神社周辺に限られる。猪目墨書土器が帰属する8世紀後半～9世紀前半は、遺構が遺跡群内全体に広がる時期であるが、調査区北部や南部から出土する墨書土器の中には猪目は確認されず、調査区中央部にのみ見られるのである。すなわち猪目の墨書は集落全体で共有されていたわけではなく、きわめて限定的な範囲で使用されていたということになる。

4 猪目の意義

猪目は、文字どおりイノシシの目を象ったものとされ、魔除けや火除けの記号とされている。所謂ハート形であるが、実際はハート形の逆位が本来の向きである。また、この他に「い」の字を崩



第6図 桐原牧神社の屋根飾りにみる猪目
(出典：桐原区誌)



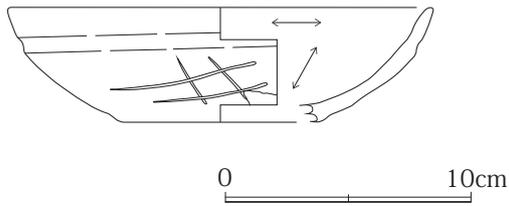
第7図 扇平出土の火舎高炉の蓋 (S=1:2)
(出典：戸倉町誌第二巻 歴史編 上)

したものであるという説や、菩提樹の葉の形であるという見解もある。日本における猪目の最古のものは、6～7世紀の古墳から出土したとされる倒卵形鏝にみえる透かしである¹⁾。果たして当時から「いのめ」と呼んでいたのか、またそれ自体に辟邪の意味があったのかも不明であるが、少なくともこの文様が古墳時代にまで遡ることがわかる。

「猪目」の呼称は14世紀に成立した『太平記』や室町時代の『義経記』にみられ、鉞に施された透かしを「猪の目」と表現している。また1832年に喜多村信節が記した『筠庭雑録』には、「いの目」を眼象²⁾などと同様に穴の名前であるとし、「旧説に猪の目として猪は猛獣なる故、武具に是を用といへり」と記している（日本国語大辞典2002）。つまり武具に猪目透かしを施すのは、イノシシの獠猛さにあやかっていたためとの認識であり、戦場における災いを跳ね除ける利益を求めて猪目を取り入れていたことが窺える。

猪目の使用例として最も多いのは、寺社建造物である。寺社の建築にみられる猪目は懸魚と呼ばれ、古代の寺院などにも施されている。猪目懸魚は火伏せの意味を持ち、寺社が火災に遭わないようにとの祈りを込めて広く使用された。また、平安時代から鎌倉時代にかけて、寺社の扁額の額縁にも猪目がみられるようになり、建物だけでなく石造物の透かしなどにも用いられる場合もある。この猪目の使用は現代にまで引き継がれており、桐原牧神社の屋根飾りにもこうした猪目がみられる（第6図）。考古資料としては、本遺跡群の出土ではないが、冠着山の扇平で、平安時代後期に位置づけられる3つの猪目をクローバー状に配置した火舎高炉の蓋が出土した例がある（第7図）。

これらを鑑みると、猪目とは寺社との関連が深く、呪術的な意味合いが強いといえる。呪符の意味を持つ記号といえば、先述したとおり「#」や五芒星が挙げられ、これらは木簡等にも記されることがある。特に「#」の記号は土器にも書かれる場合が多く、浅川扇状地遺跡群の今年度調査では、土師器の体部外面に「#」を刻んだものが出



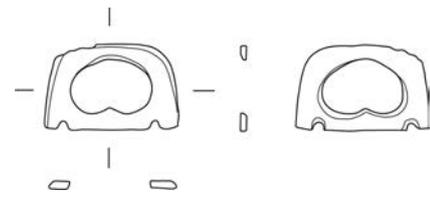
第8図 「#」刻書土器 (2019年度出土)

土している (第8図)。猪目が木簡等に使用された例はないが、土器に書かれた猪目も、こうした概念によると考えたい。

また、猪目墨書土器の出土地点が桐原牧神社の周囲に限られるということも、ひとつの注視すべき点である。この一帯には古代に桐原牧が存在し、良馬の産地であったと考えられている。桐原牧神社は古くは「弁財天」「弁天宮」と呼ばれ、弁財天を祀っていた。現在の祭神は大宜都姫命と、弁財天と同一視される市杵島姫命であり、『桐原区誌』(2019)には「馬と水の守護神を祀る」とある。

弁財天は海や泉、川など水に関係する場所に祀られることが多く、実際に桐原の村には三つの水流と七つの清水が存在していたと『桐原区誌』には記されている。文政期に「桐原牧神社」の社号が与えられると、境内には桐原牧神社と弁天社の両方が祀られるようになったが、明治の神仏分離の流れを受け、弁天社は桐原牧神社の南東約100m地点に移され現在に至る。桐原牧神社の前身ともいべき弁天社だが、その成立年代は不明とされている³⁾。猪目墨書が書かれた時期に神社が存在していたかはわからないが、猪目が呪符の意義を持ち、寺社との関わりが深いと考えるならば、神社がある土地で猪目を施した墨書土器が出土するという事は、何らかの関連性が推察できる。前述したように民俗資料ではあるが、猪目は火伏せのシンボルとして水との関わりも指摘されているため、その可能性も考えられる。なお、桐原牧神社に程近い土坑 (SK3494) からは、平安時代以降のものと考えられる猪目の透かしが入った銅製品も出土している (第9図)。これも猪目が桐原牧神社の「場所」と関係がある傍証となろう。

ただし、他の呪符記号とは異なり、猪目が木簡などの文字資料に見られないという点では、いま



第9図 猪目の銅製品 (S=2:3)

だに疑問は残る。今回は猪目そのものの意味や猪目墨書土器の出土位置の傾向から、呪符などのまじないに基づく可能性があるとして述べるに留めておくこととする。

5 おわりに

以上、浅川扇状地遺跡群出土の猪目墨書土器について、若干の検討を行った。しかし、対象範囲の狭さや資料の少なさから十分な考察には至らず、推測の域を出ない。また、猪目が全時代に一貫して同じ意義を持って使用されていたとは限らず、時期や地域によってその使用目的は変わっていた可能性もある。現代にみられる猪目がかつての意義を失い、形骸化または別の意義を持って使用される場合が多いことも、それを物語っている。さらに、猪目墨書土器の出土位置の付近では、「大」「元」「貝」などの墨書土器も一定量みられ、これらの意義も加えて考えていく必要がある。今後はあらゆる可能性を念頭に置きながら、地域や資料の対象範囲を広げて詳細な検討を行ってきたい。

註

- 1) 出土した古墳については不明。
- 2) 祭祀具である三方に開けられる穴の名称。窓や石造物などに施されることもあり、ゾウの目を象ったとも言われている。
- 3) 一説には創建は1000～1500年前とも言われているが、確証はない。

参考文献

- 桐原区誌編纂委員会 2019『桐原区誌』
 戸倉町誌編纂委員会 1999『戸倉町誌 第二巻 歴史編 上』
 長野県埋蔵文化財センター 2012『東條遺跡ほか<図版編>』
 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 92
 長野市教育委員会 2012『桐原宮北遺跡』長野市の埋蔵文化財第130集
 日本国語大辞典第二版編集委員会 2002『日本国語大辞典 第二版』
 平川南 2000『墨書土器の研究』
 山下秀樹 2008「扁額の意匠と構造—平城宮第一大極殿正殿扁額の復元考察—」『奈良文化財研究所紀要 2008』

(3) 長谷のかめやき—長谷焼調査の覚書—

柴田 洋孝

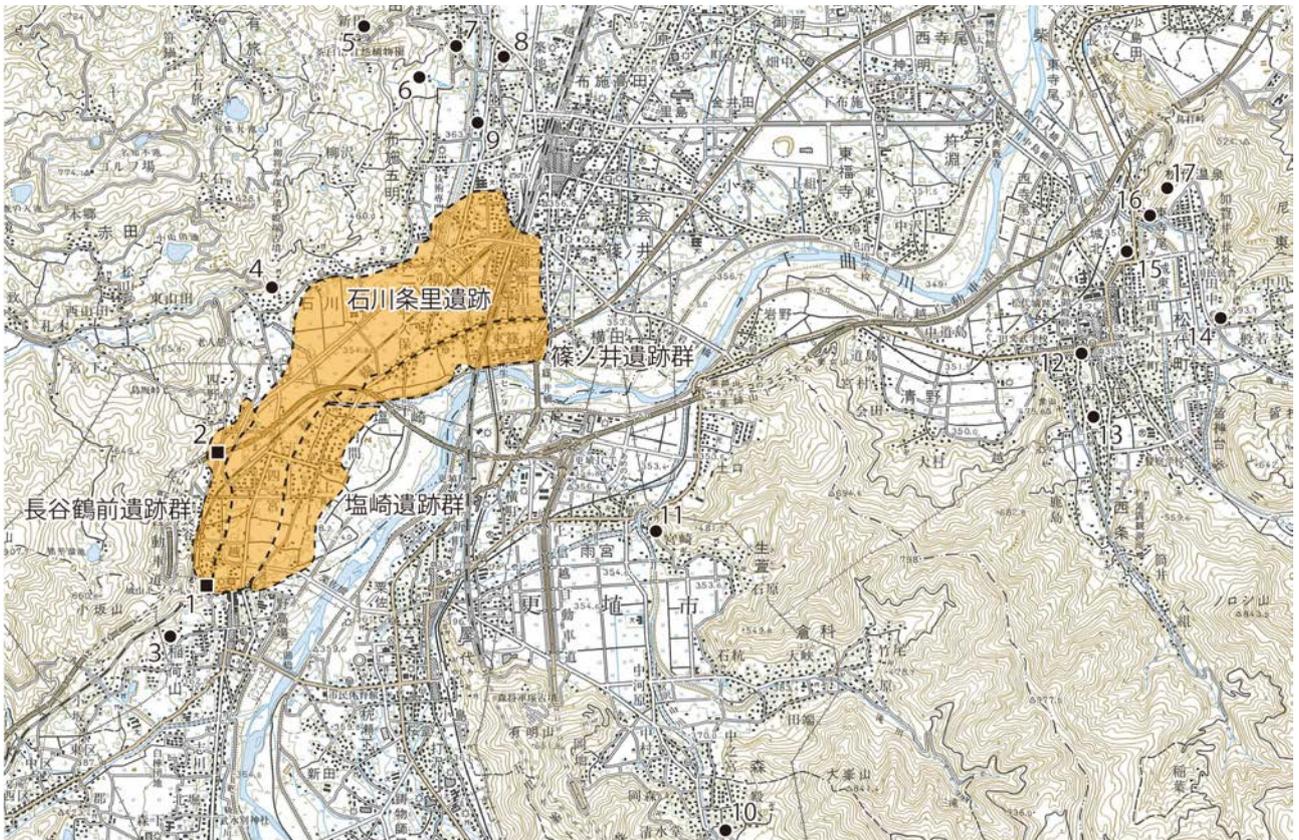
1 はじめに

長谷鶴前遺跡群は、長野市篠ノ井長谷に所在しており、2017・2018年度に一般国道（坂城更埴バイパス）改築工事に伴って発掘調査が行われた。1～3区の調査区において、平安時代の水田跡、室町～戦国時代の居館に伴う堀跡や道路跡、明治時代の焼物を製作した工房跡など、非常に多岐にわたる時代の遺構を検出した（第1図）。中でも、明治時代の長谷地区で焼かれた「長谷焼」に関連する遺物は、本発掘調査における遺物出土量の大半を占め、地方における近代産業の一端が垣間見える貴重な資料であることが、発掘および整理作業によって判明した。

本稿では、発掘調査の状況を振り返るとともに、確認した長谷地区に営まれた長谷焼という近代産業の痕跡から、近代における埋蔵文化財の意義についても考えてみる。



第1図 長谷鶴前遺跡群の調査区（空撮）



第2図 長谷鶴前遺跡群の位置と周辺古窯

1. 長谷鶴前遺跡群・長谷窯（本調査地点）
2. 鶴前遺跡
3. 桑原窯
4. 石川窯
5. 岡田新田窯
6. 岡田弘沢窯
7. 岡田南町窯
8. 岡田大門窯
9. 五明窯
10. 森窯
11. 雨宮窯
12. 原製陶所
13. 代官町窯
14. 天王山窯
15. 荒神町窯
16. 寺尾山根窯
17. 寺尾嘉平治窯・寺尾名雲窯

2 長谷鶴前遺跡群の調査と工房跡の発見

本遺跡群は、1988年に中部電力の送電用鉄塔建設に伴って長野市埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、1988・1990年には長野自動車道の建設工事に伴って長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われている（第2図）。この時の調査は、いずれも「鶴前遺跡」の名称で報告されており、本調査地点からは直線距離で北へ約1.3km離れている。確認された遺構は、縄文時代から平安時代の竪穴建物跡や中世の掘立柱建物跡などであり、遺跡群における包蔵年代も同様のものとなっている¹⁾。

今回の調査地点は、前述の調査地点から離れた未調査の場所であり、山際という地形、包蔵範囲の縁辺である点などからも遺構の有無は未知数であった。そのため、対象範囲内のトレンチ調査を行い、状況を把握する必要があった。掘削の結果、3区のトレンチにおいて、近世～近代とみられる焼物や土製品が、地表直下からまともに出てきた。このことから、未確認であった遺跡の状況を把握するためには、平面的な調査が必要であると判断した。

表土の掘削を進めて遺構の確認を進めたが、全体的に不明瞭であったため、サブトレンチを設定して土層を確認し、セクションベルトを残した状態で掘り下げを進めるなど、状況の把握に努めた。掘削の結果、中央に穴が開けられた方形の巨石が二つ並んだ状態で見つかり、この石を検出するまでに掘り下げた土の中には、大量の焼物の他に、用途不明の土製品が多く含まれていた。出土資料および現地状況について、元愛知県陶磁美術館



第3図 重機掘削で出土した油壺

副館長の仲野泰裕氏に見ていただいたところ、土製品の多くは窯で焼成する際の道具であり、穴が開けられた巨石は轆轤を据えるための台石であることが判明した。台石は出土状況から、投棄されたものではなく据えられたままの状態であり、本調査区内に工房跡（作業場）があったことを確認した（第4図）。また、工房跡の基礎の痕跡とみられる石列も確認した。このことから、調査区の近くには焼物を焼いた窯も存在していたと考えられたが、窯そのものに関連する遺構などは調査区内で発見することはできなかった。また、土地所有者の許可を得て、窯があったと想定した山の斜面地などの踏査も行ったが、確認することはできなかった。

3 長谷焼に関する記録と調査状況の照合

長野市にとどまらず、県内各地には江戸時代から続いた地方窯が30基以上存在しており、研究が行われている。特に、北信地方は江戸時代後期に開業した「松代焼」²⁾が有名であるが、「長谷焼」に関しては資料の少なさからか、塩崎村史に記載があるのみで、地方窯の研究に取り上げられることはほとんどなかったようである。一方、松代焼



第4図 白色の粘土で固定されていた轆轤台石



第5図 焼物と窯道具が廃棄された穴

の研究を行った陶芸家の唐木田又三氏は、廃業した各窯元に赴いて現地状況を調査し、所蔵品や窯元の風景などをその著書に収めている。そのなかには長谷窯に関する記載もあり、「地主の企業」として紹介している³⁾。

長谷窯の創業者は塩崎村（現長野市塩崎地区）の宮崎清右衛門〈1826（文政9）年～1893（明治26）年〉である。共同出資者である更級郡赤田村（現長野市信更地区）の小林彦八郎とともに、1867（慶応3）年8月に、宮崎清右衛門の敷地内に開業している。1875（明治8）年には清右衛門一人の所有となり、長男である七重〈1848（嘉永元）年～1924（大正13）年〉が跡を継ぐが、七重が目を悪くし、妻のふさが死去した1896（明治29）年頃に窯を閉じている。なお、清右衛門は職人を多治見から呼んで製品を作らせ⁴⁾、自らは作ることはなかったが、息子の七重は仕事の手伝いを行うことで仕事を覚えていったのだという。なお、窯の廃業後は、土地を宅地や農地へと転用している⁵⁾。

窯と工房は宮崎家の南側の敷地に築かれ、窯は山の斜面を利用した東西方向に延びる五連房の登窯であったとされる。間口は二間五尺五寸（約5.3m）との記録がある。閉窯後も窯は壊されず、明治の末頃までは残っていたという。一方、工房は窯の「北側」に建てられていたようで、間口9間（約16.3m）、奥行2間3尺（約4.5m）を測り、職人とその家族が住めるようにもなっていた⁶⁾。窯焚きは年に2回で、製造していた品物は大小の甕を主体として、播鉢・紅鉢・片口鉢・徳利・土瓶などの日用雑器であったとの記録があり、旧役場の文書には製造数と売上代金の記録も残っている。生産数が増加している状況から、経営が順調であったことがうかがえる（第1表）⁷⁾。

焼物の原料となる土については、布施五明村（現長野市篠ノ井柳沢周辺）と桑原村（現千曲市稲荷山桑原周辺）の白土を用いていたようだが、岡田や小市の土を使ったとの言い伝えもある。土の配分などについての詳細は不明であるが、轆轤による成形後は天日で乾燥させ、1日かけて素焼きを

年	製造数	売上代金	利益
1877（明治10）	980	—	—
1878（明治11）	880	75円	—
1879（明治12）	1,190	—	—
1881（明治14）	1,031（1,061）	125円	—
1883（明治16）	1,150	230円	—
1889（明治22）	7,620	320円	40円
1892（明治25）	8,400	293円	—

第1表 長谷窯の生産数の推移と売上

行い、施釉後に約2日間の本焼きをしていたとされる。燃料には松薪が使用されていたようだが、仕入先などの詳細は分かっていない。

なお、塩崎村史の補記には、長谷窯へ岡田窯の米山通太郎氏らが手伝いに行っていたとの聞き取り記録が収められている⁸⁾。岡田大門窯は、もともと松代横町窯から岡田の地に移り住んだ米山直治氏が、1873（明治6）年頃に操業を開始した窯であり、長谷の閉窯した後の1926（大正15）年頃まで続いていたとされる。岡田大門窯の職人、および直治氏の長男である通太郎氏が長谷に手伝いに行っていた時期は、長谷窯の晩年頃であるとみられ、岡田焼を通じて長谷焼も松代焼との接点があったと考えられる。

発掘調査の出土品から実際の売上などに関して考証することは難しいが、確認できた工房跡と窯跡の関連については記録との照合が可能である。工房跡に関しては、前述のように間口9間（約16.3m）、奥行2間3尺（約4.5m）とあるが、間口を東西または南北にとるかで大きく変わる。

長谷と同様に、轆轤台石が据えられた状態で見つかっている石川県加賀市松山にある松山窯跡は、東西方向に並んでいる轆轤台石と同じ方向に建物の間口がとられている。この点からすると、轆轤は工房の間口、ないしは長軸方向の壁に沿って据えられていたものと理解できる。

長谷の轆轤台石の出土状況からすると、工房跡の間口は轆轤台石と同じ東西方向にとられていたと考えられる。また、轆轤台石が壁に沿っていたと仮定した場合、北壁に沿っていると建物跡は山際に近い位置になり、窮屈な印象を受ける。一方、南壁に轆轤台石が沿っていた場合は、山際まで余裕がある。記録に残る建物範囲を網掛けで示すと、

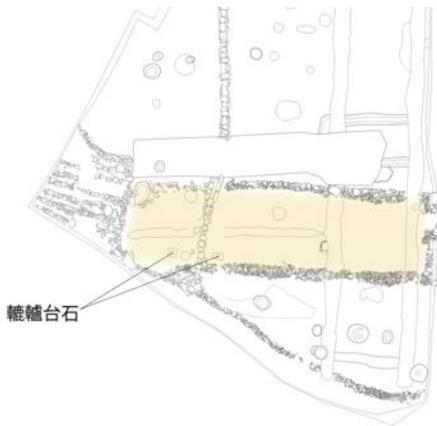
ちょうど石で囲まれた範囲にも収まるため、この辺りが工房跡であったとみて問題ないと考えられる（第6図）。

次は窯の位置である。窯跡は踏査をしても状況が不明であったため、全くの推定となる。記録では、①山の斜面を利用した東西方向の登窯、②工房の南側にあった、という2点のみである。①からすると、東西方向の斜面を利用するという事は、山の裾は南北方向に伸びている場所であると解釈できる。3区に隣接する山（湯ノ崎山）⁹⁾は、調査区を囲むように千曲川に向かって突き出ているため、裾が南北方向に伸びているのは3区の西側となる。ここで問題となるのは、工房と窯の位置関係である。塩崎村史には「窯と工場は宮崎家

の南側の敷地に築かれ、（中略）、作業場は窯の北側に建てられていたようで」と記載がある。裏を返せば「作業場の南側に窯があった」となるが、先に想定した工房跡の位置の南側は、山の裾が東西方向に伸びているため、山の斜面を利用した東西方向の窯を築くことは困難であると考えられる。村史の記載が誤りなのかは定かでないが、おそらく位置関係としては、東西棟の工房跡が山際に建てられ、それと直列するように東西方向の窯が西側の斜面に築かれ、その北側に本家である宮崎家があったと考えるほうが自然であると思われる（第7図）。

4 出土遺物の整理と資料調査

出土した遺物の整理を進めたところ、素焼の状



轆轤台石が建物の南壁に沿っていると想定した場合

第6図 工房跡の想定



轆轤台石が建物の北壁に沿っていると想定した場合

平面図縮尺1:400



第7図 工房跡と窯の位置関係（東より）

態の破片と、釉薬がかけられた陶器（本焼）の破片があり、焼成が2度に分けられていたという記録と一致している。なお、出土した遺物量には大きな違いが見られ、圧倒的に本焼の破片が少なく、接合作業を進めても完形になるものはほとんどみられなかった。おそらく、本焼については製品として出荷しているため、窯元にはほとんど残っていなかったためと考えられる。また、塩崎村史に記載されている器種以外にも、多くの製品を製造していることが判明した。確認できた器種は、甕・鉢類（捏鉢・植木鉢・片口鉢・搦鉢）・壺類（油壺ほか）・徳利・火入・茶入・灯明具・蓋類（急須・灯明・土瓶・土鍋）・羽釜・豆羽釜・七厘などである。甕が主体であったようで、大小様々なものを作っていたようであるが、最大のものは器高が72cmと非常に大きなものである。

出荷していた製品の一端をうかがい知ることができる遺物は数少ないが、確認できる資料には松代焼を彷彿とさせる青緑の釉薬が見事なものもあり、松代焼とのつながりを示すものであると考えられる。なお、出土遺物の中には磁器製品も複数みられるが、長谷で焼成していたのは陶器であったため、磁器製品は工房跡などで家人や職人が使用していた日用品であったとみられる。

窯で使用された道具類は円錐ピン・輪トチ・焼台・匣鉢などである。いずれも、窯内の焼成室で他の製品と癒着しないように製品同士の間には挟み込んだりして使用されるものである。円錐ピンについては大きく分けて小・中・大・特大があり、製品に合わせて使い分けがされていたようである。また、輪トチや焼台についても様々なサイズがあり、こちらも使い分けされていたことが分かっている。

長野市内には、途絶えてしまった松代焼を現在に伝えるために、その製法を再現している窯がいくつかあるが、資料の整理にあたって、松代にある株式会社松代の小澤経弘氏にお話を伺うことができた¹⁰⁾。長谷焼の印象については、「非常に完成された技術である」という率直な意見をいただいた。現代の技術を駆使しても、一度途絶えてし



第8図 松代焼に似た釉薬の製品



第9図 豆羽釜の破片を再利用したテストピース(鉄釉)

まった技術を再現・調整することは難しく、松代焼特有の青緑の釉薬の発色が思い通りにいかないこともあるという。長谷で出土した製品に見られる青緑の釉薬の発色は、100%といえるほど完成度が高いものであり、窯の密閉度によって酸素量に変化し、発色が大きく左右される点を考えれば、窯自体の完成度も高かったと考えられるとのであった（第8図）。なお、松代焼特有の釉薬は、素地に直接かけただけでは素地の鉄分と反応して発色しないため、下釉をかけたうえで、さらに炭酸銅粉を混ぜた別の釉薬を上釉としてかけるのだという。

「発色」という点では、長谷の職人も釉薬の調整に気を使っていたようで、製品にならなかった素焼きの破片を再利用して、釉薬を複数塗っている破片（テストピース）も出土している（第9図）。松代焼の釉薬ではなく、基本的な鉄釉の発色具合の確認をしていたようであるが、納得のいく配合を追い求めた職人の努力が見え隠れする遺物だと感じる。

5 おわりに

今回の発掘調査の最大の成果としては、埋もれ

ていた地域史を裏付ける近代遺跡の発見につながった、ということであろう。わずか30年余りという短い期間の中で営まれた長谷窯は、地域の生活や産業に貢献した地元の歴史であり、宮崎家の歴史ともいえる。近代遺跡がほかの時代の遺跡と違うところは、より生々しい生活の記録が読み取れ、「個」としての人間活動までも垣間見えるなど、ある種の「親近感」を得やすい点があるのではないだろうか。

長谷を含めた塩崎地区は、今回の工事によって大きく変わりつつある。すでに湯ノ崎山にはトンネルが開通し、千曲市の稲荷山地区が直線的につながっている。時代とともに生活の利便性が向上する一方で、こうした地域史の喪失が危ぶまれるのも事実である。連綿と続いた地域と人の歴史が、長谷の地にもあったことを今回の発掘調査は示しており、近代遺跡の記録調査の必要性和面白さを感じることができるのではないだろうか。

末尾ではあるが、2か年に及ぶ発掘調査では、長谷地域の住民の皆様に多大な御協力をいただいた。特に長谷窯の創業家である宮崎様には、当時の状況に関する聞き取りや蔵の見学、古地図の閲覧など、お忙しい中にも関わらず、様々なことにご対応していただいた。記して感謝を申し上げます。

註

- 1) 図2の遺跡包蔵範囲、および遺跡年代は、長野市文化財データベースの情報に基づいている。調査及び各報告書では、鶴前(つるまえ)と表記・報告されているが、2017年に旧字名の鶴前(つるさき)にデータベースの表記が改められている。
- 2) 松代焼は、1816(文化13)年に松代藩で行われた殖産興業政策の一つであり、7つの窯が築かれた。藩の窯として始まった松代焼は民窯へと広がるが、昭和初期までにすべての窯が廃業している。その一因は、1872(明治5)年に開業した鉄道網の拡充による安価製品の流通拡大といわれる。
- 3) 唐木田氏の著書には、長谷窯を含めた松代焼系統の窯元に関する写真や図面のほかに、古文書や古記録などの情報も収められている。
- 4) 長谷だけでなく、県内の多くの窯の職人たちは、瀬戸・多治見方面から流入してきたと考えられる。
- 5) 土地の造成を行った際に盛土をおこなったようで、この盛土内に焼物や窯道具の破片が多く混入していた。宮崎家は現在でも「かめ屋」と呼ばれ、往時は「長谷のかめやき」と呼ばれていたようである。
- 6) 『塩崎村史』には、1880(明治13)年6月に作成された

建坪取調簿の間口9間、奥行2間3尺と記載している。一方、唐木田氏の著書では1883(明治16)年の旧役場文書に記載される間口8間3尺(約15.4m)、奥行4間(約7.3m)が紹介されており、寸法が異なる。本稿では、作成年が古い公文書をもとに作成された村史の記載を採用する。間口についてはわずかな差であるが、奥行については倍近く異なる。もしかしたら、工房の増築を行ったのかもしれないが、定かではない。

- 7) 第1表は、塩崎村史の記載と、唐木田氏の著書に記される役場文書の内容を合わせたものである。なお、明治14年の製造数に関しては、両記録(1,031:塩崎村史、1,061:唐木田氏著書掲載文書)に違いがみられるため、併記している。
- 8) この聞き取り記録は、岡田大門窯の創業者である米山直治氏の孫、米山二三男氏の話である。しかし、どのような経緯で手伝いに行ったのかは書かれていない。
- 9) 調査区の南西に位置している湯ノ崎山は、旧塩崎村と稲荷山村の境でもあった。この山は流紋岩主体の山で、切り出された石は土木工事などに広く利用されたという。宮崎氏の敷地内には、今でも切り出された柱状の石材が残されている。
- 10) 小澤氏は、当センター展示室に来所し、自身の見識を広めるために、焼物の源流ともいえる土器に関して学びたいとおっしゃっていた。その際に、展示してあった長谷の製品についても興味を示され、工場を視察させていただく機会を得た。その際には、出土品(素焼・本焼・窯道具)も実見していただいた。

参考文献

- 安藤裕ほか1987『信州の焼き物』
唐木田又三1993『信州 松代焼』
小松隆史2002「近世信濃の窯業史研究」
『金沢大学考古学 紀要』第26号
佐々木達夫1980「加賀・松山窯の発掘」
『考古学ジャーナル』171
佐々木達夫1981「加賀・松山窯の第2次調査」
『考古学ジャーナル』186
佐々木達夫2002「江戸時代の小型窯跡の系譜を探る」
『金沢大学考古学紀要』第26号
塩崎村史刊行会1971『塩崎村史』
塩崎文化財保存会2017『語り継ぐ 塩崎の今むかし』
清水昭治1972「篠ノ井周辺の陶業―窯跡をたずねて―」
『長野』第45号
菅平研究会1969『信濃のやきもの』
仲野泰裕2013「信州・善光寺寄進 染付花唐草文大燈籠の銘文について」『愛知陶磁美術館紀要』18
長野県埋蔵文化財センター1994『鶴前遺跡』
長野県埋蔵文化財センター2018『年報』34
長野県埋蔵文化財センター2019『年報』35
長野市教育委員会1989『鶴前遺跡・塩崎城跡』
長野市教育委員会2013『真田宝物館だより 六連銭』第34号
野村将之2017「再興久谷松山窯の窯詰め技法について」
『金沢大学考古学紀要』第38号
古川元三郎1991『松代焼』
和田勝彦2015『遺跡保護制度と行政』

長野県埋蔵文化財センター年報 36 2019 年度

発行日 2020（令和2）年3月23日
編集発行 （一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
電話：026-293-5926 FAX：026-293-8157
E-mail：info@naganomaibun.or.jp
印刷 三和印刷株式会社